

真剣で帝王に恋しなさい(イチゴ味)

yua

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

帝王が居た。

誰よりも愛深く、誰よりも誇り高い男が。

やがて、彼は弟子を取る。

それが自らの死を意味すると判つていながらも……

というシリアスの皮を被ったコメデイである。

北斗の拳イチゴ味、まさかのアニメ化に勢いで書きました。

北斗の拳原作キャラは基本、設定のみの出演。

聖帝の技とウザさと強さとドヤ顔を受け継いだオリジナル主人公が真剣で私と恋しなさいのキャラと大騒ぎするだけの物語。

さあ、今日も制圧前進だ。

13帝王のヒ・ミ・チュは小ネタや専門用語の解説のみです。

もし、そう言った用語等判らないものがありましたら活動報告などに書いて頂けると嬉しいです。

目次

01 帝王爆誕	1
02 帝王お宅訪問	9
03 帝王強襲	16
04 帝王敗北	21
05 帝王入学	26
06 帝王不覚	31
07 帝王文化・前半戦	39
08 帝王文化・後半戦	47
09 帝王の一日・前半戦	60
10 帝王の一日・中盤戦	67
11 帝王の一日・後半戦	75
12 帝王の一日・終盤戦	80
13 帝王のヒ・ミ・チュ	87
14 帝王のメリークリスマス	97

01 帝王爆誕

川神市から北に数県を跨いだ山奥で少年と老人が対峙していた。少年は黒いバンドで目隠しをされ、老人は身体中に裂傷を負っている。

(見事だ)

老人は心中で感嘆する。

少年は目隠しをされながら老人と拳を交わし、老人の速さこそ全盛期に及ばぬもののキレ味は最高峰に達する手刀を全て避け切り、反撃までした。

そこまでしてなお、息も切らせず構えも取らない流派理想の状態を維持している。

(最早、是非もなし)

老人は覚悟を改める。

戦う前に覚悟は決めていた。それを再確認するだけの深呼吸。少年も老人から改めて発せられた強い気配に体を引き締める。互いに間合いを計り、ジリジリと距離を取り合う。

そして、互いの呼吸が近づき完全に一致した瞬間、鳳凰が二匹、空を舞った。

老人が目覚めたのは山奥に建てた小屋の中。

硬い布団の感触と身体中に走る傷が熱を持って痛みを知らせる。

だが、傷に塗られた黒い軟膏が熱を抑え、枕元に置かれた手紙が老人の心を癒した。

『天に輝く極星は一つ。老星は最早墜ち、輝きは無し。帝王は前進するのみ。老人は縁側にて茶を飲むべし』

寝床にて涙を零し、数日後に山を降りた老人が帝王の師であった事を知る者はいない。その日、川神院は奇妙な緊張に包まれていた。

師範代クラスが勢揃いし、釈迦堂すら正装して控えている。

そして、師範であり日本武術の総本山たる川神院を率いる川神鉄心

もまた緊張の中にあった。

(まさか、奴に弟子とはのう)

思い出すは若かりし頃、遅過ぎた武神と持て囃された若気の至りに覗いてしまった裏の世界。

殺し殺される覚悟を乗せた拳が人体を抉り、切り裂き、粉碎する毎日の人の命が一日に食べる米の数より多く消費される世界。

愕然とした。

止めようと思った。

戦争が終わったならば命は何よりも価値があるものに戻ったのだから、と裏の世界で拳を振るった。戦争には間に合わなかったが、自分はこの為に生まれたのではないかと思えたからだ。

だが、足りなかった。力も意思も信念も何もかもが足りなかった。目の前の命をいくら救っても、別の場所で新たな争いの火種が燃え上がる。どうしようもなかった。一人では何も成せなかった。

だが、出会いがあった。

裏の世界に燦然と輝く極星。逃走なき帝王。裏の世界最強と呼ばれた南斗の将星。暗殺拳を修めながら誰よりも愛深き男が鉄心の味方となってくれたのだ。ヒューム・ヘルシングと並び、鉄心のライバルとなり、その愛深き性質故に裏の世界を安定させる為に制圧前進した男は裏の世界に生きる故に世間に世界に名前を知られる事は無かった。

鉄心は常々、彼に表の世界に出ないかと打診を続けていたが、一子相伝の暗殺拳を絶やす事を良しとせず裏の世界に埋もれていた。

そんな彼が弟子を取っていたと知ったのが三年前。そして、その弟子が一子相伝の暗殺拳を携えて川神院に挨拶という名の道場破りに来るのが今日である。

あの何よりも強く、愛深き男の弟子に興味は尽きない。何よりも孫娘の川神百代と同じ年齢ながら、暗殺拳を修めたという実力と才能ならば百代の強すぎるが故の孤独すら癒せるのでは、と期待せざるを得ないのだ。

そして、

「師範、お客様が来られました」

「うむ、お通ししなさい」

弟子が案内をする足音が聞こえる。

あの男の弟子ならば好漢足る少年に違いない。そんな期待を

「フハハハハハ、ここが川神院か。デカイだけで脆そうだな」

居丈高な高笑いが打ち破った。

「お、おう。元気が良いな南斗鳳凰拳伝承者殿よ」

「む、貴様が川神鉄心か。成る程、サウザーのジジイよりも強いようだな。だが、年寄りには縁側で茶でも飲んでいい。帝王たる俺に後進は任せてな」

フハハハハハ、と両手を広げ背筋を仰け反らしながら再び高笑いをする少年を見て鉄心は

(ああ、そう言えばサウザーも若い頃はこんなんじやつたなあ)

と懐かしさに遠い目をするのだった。

「気に入らねえなあ」

少年の独壇場となった道場の雰囲気の水をかける声。押し潰した銀紙をこすった様な刺々しく、不快な気配が立ち昇る。

「釈迦堂……口を慎むヨー」

横からルー師範代が制止の声を上げるが、そこに何としても止めようという強さは無い。

少年の不遜な態度に真面目が服を着たようなルーと言えどカチンと来るものがあつたのだ。そして、それはそのまま川神院の弟子達の総意でもある。

ようは、いつも暴力沙汰で問題を起こす釈迦堂に今日ばかりは積極的に止めるストッパーのいない危険な状態にある、と言うことだ。さながら、安全装置のない拳銃が剥き出しの刀か。いつ、少年に釈迦堂からの生々しい殺意が物理的に突き刺さるか判らない一触即発の空気が川神院を満たしていく。

(まづいのう)

川神鉄心は白く長い立派な顎髯をしごく。

釈迦堂の暴発は日常茶飯事だが、相手が普通ではない。南斗鳳凰拳はその技の性質上、手加減が非常に難しい。釈迦堂が負ける事は万一にも無いが、武道家としての生命が終わる危険がある。

だが、止めるという選択も双方の遺恨を残す事を考えると結局は今、最悪を回避する為に自分の目が届く所でガス抜きをさせた方がまだマシか。

「あゝ、判った。武道家ならば拳で語るが良からう」

日本が誇る武の総本山、川神院の師範代と子供の対決。そこに反対の声は上がらなかった。板敷きの道場にて向かい合う二人。

整えていた身なりを崩し斜に構える釈迦堂刑部。

露出の高い鉞のついた黒い革服で不適に仁王立ちする少年。

二人の間には闘気がせめぎあい、ぶつかり合い、渦巻いて空間を歪ませる。

「そう言えば名乗りを上げていなかったな。不敬を謝罪しよう」

全く謝る姿をしない仁王立ちのままに少年は釈迦堂を睥睨する。

「へえ、殊勝な所もあるじゃねえの。よし、いいぜ。俺は釈迦堂刑部、ためえの高い鼻をへし折る男だぜ」

「フハハハハハ、よき啖呵だ。心配しなくとも敗北は貴様の必然。天に輝く将星は一人、我が名は南斗天。なんとてん退かぬ、負けぬ、勝利しか知らぬ帝王よ」

捻れる様に張り詰めていた熱い空気が更に高まり、肌を打つような熱風が逆巻いていく。

「口の減らないガキだぜ。お仕置きはちよいと厳しくなるが泣くんじゃねえぞ」

「同意する。大人が子供に泣かされる事ほど憐れな事はないからな」

釈迦堂は敵意に満ちた残酷な表情を張り付け、天は不遜な余裕の笑みを崩さない。

最早、場は極まった。

川神鉄心は老骨とは思えぬ叫声を腹の底から解き放つ。

「決闘開始!!」

先に仕掛けたのは天であった。

しかし、天が動いた事を知覚出来たものは誰一人居ない。気づいたら釈迦堂の胸に深々と十字の傷が刻まれ、赤い鮮血が飛沫いていたからだ。

「なにいつ!?!」

胸に走る痛みと血飛沫に釈迦堂は声を荒げる。

「フハハハハハ、極星十字拳の味はどうかかな?」

我が拳は最速にして最強。何者も寄せ付けぬ帝王の拳よ!!」

恐るべし速さ、恐るべし切れ味。川神院の師範代に初撃で手傷を負わせるその強さに戦慄を禁じ得ない一同だが、それ以上に

(あのドヤ顔がウゼえ……)

天の浮かべる得意絶頂の笑みが不快感を掻き立てる。

「チイ、恥かいちまったぜ」

釈迦堂が胸に手を当てて傷口を撫でると飛沫いていた出血が止まる。

「ほう、手当ての心得もあるか。川神院の弟子は多才だな」

関心した様に頷く天に釈迦堂はふてぶてしい笑みで返す。

「俺はこういった小技は苦手な方さ。むしろ、決るのが大好きなのさあ、行けよりリングウ!」

釈迦堂の両腕に闘気が集中し、リング状の光輪が天に向かって大気を抉り殺到する。

それに対して天は両手を交差し、全身に闘気をみなぎらせる。

「帝王に逃走は無いのだ!」

恐るべき速さの手刀が道場全体の空気を震わせる。

全身にみなぎらせた全力の闘気を手刀を交差させる一瞬に結束し、爆発的な闘気が釈迦堂のリングに叩き込まれ、かき分け弾き飛ばす。

「マジかよ……」

釈迦堂の言葉には驚き敬意があった。

手加減など微塵もない殺す気で放った自らの人生を賭けて編み出した奥義。それが十歳そこそこの子供に破られた驚愕と、その幼さで極めた拳の才能と自負、そしてそれらを支えるたゆまぬ努力の香りを

そこに感じたが故の尊敬すら覚える気高さ。

何よりも

「フハハ……今のは効いたぞ。流石は川神院の師範代を勤めるだけはあるな、釈迦堂刑部。我が人生でこの身に受けた最大の1撃であったぞ」

全身を朱に染め、両腕を青黒く染め、手刀に使った指は全てあらゆる方向に折れながらも仁王立ちの姿勢を崩さない南斗天という少年の姿に確かに帝王と名乗る片鱗を見たからだ。

「フハハハハハ、まだやるぞ。釈迦堂刑部よ、貴様も我もまだ1撃を与えあつたばかり、強者の闘争はここからだ！」

かすれも震えもしない少年の声に、釈迦堂の傷の痛み消えきらね胸の中に持ち上がる感情があつた。

色々な味や匂いを混ぜ混んだ不可思議な感情だ。イライラする様なワクワクする様な激烈で凶悪で怒涛の様に押し寄せる、何よりも熱く熱くたぎる激しい感情。自分の全てをぶつけたくなる内にこもれば複雑な、外に出してしまえば単純で真っ直ぐな感情。

「ああ、そうだ。闘いはまだまだこれからだ！」

強い奴と死ぬまで闘いたい。

これ以外に必要な感情はあり得ない。

満身創痍の少年と胸に深傷を追った大人は心行くまで闘いあつたのだつた。

川神院の板敷きの道場にて大の字になって倒れるのは南斗天であつた。

「くはははははは、釈迦堂刑部よ。見事であつた。完膚無きまでに我の負けよ！」

釈迦堂からの返り血と自らの体から流した血で全身を真っ赤に染めながら少年は笑う。

「なかなかしつこかつたぜ、ガキ」

対して釈迦堂は全身に切り傷を負いながらも、最初に受けた胸の傷以外には深傷はない。

「ふっ、南斗鳳凰拳を修めただけでは帝王足り得なかつたようだな」

背中を仰け反らせ、バン、と音を立てて天は飛び起き再び仁王立ちの姿勢に戻る。その姿は正に退く事を知らぬ覇者そのもの。

「けっ、タフなガキだぜ」

中腰になりながら息を切らす釈迦堂に天は両手を広げ仰け反りながら笑う。

「フハハハハハ、例え死すとも帝王に逃走は無い。貴様らただの武道家には理解出来ぬ道よ!!」

だが、と天は真面目な顔で釈迦堂を真っ直ぐに見る。

「釈迦堂刑部よ、貴様は真に強かった。川神院は確かに武の総本山であつたわ」

「……おうよ」

拳を交わした者同士でしか通じ会えぬ感情を持って二人は深々と互いに礼を取った。

「うむ、見事であつた」

川神鉄心も最初は気が気ではなかったが、終わってみれば心すく良い決闘となつた。釈迦堂の陰に傾き易い性質と、天の傲岸不遜な性質が上手く噛み合った意外な、だが清々しい結果に手を叩く。川神院の弟子たちも惜しみ無く拍手を送り、釈迦堂に賛辞を天に健闘を称える声をかける。

爽やかな空気に包まれる道場に

「何だ、何だ。私抜きで何か楽しそうな事をやっているじゃないか!」

ドタドタと足音を立てて、少女が道場に走り込んで来た。

黒髪をショートに切り揃え、前髪を交差させた風変わりな髪型に、つり目と体中から発する強気な雰囲気、活発というかがき大将な雰囲気を感じさせる少女である。

「むっ、モモか。学校は終わったのかの?」

「とつくの昔だジジイ。私を除け者にして……」

孫娘たる少女にシレッとしながら声をかける鉄心と、それに反発する様に声を荒げる川神百代。

しかし、血まみれで道場に仁王立ちする同世代の少年に絶句する。何故なら……

「うぎやー、釈迦堂が子供殺してるー！」

南斗天が白目を剥いていたからであった。

「ばっか、モモ何を言ってるやがる。まだ死んでねえよ……多分」

「きゅ、救急車を救急車を呼ぶんじやー！」

「お、落ち着いて師範。治療ならここで出来ますヨ」

大騒ぎする川神院の中心に立つ南斗鳳凰拳伝承者、南斗天。

つまりはここから全て始まったのである。

真剣で私に恋しなさい×北斗の拳（イチゴ味）クロス

真剣で帝王に恋しなさい（イチゴ味）

02 帝王お宅訪問

「フハハ、フハハ、フハハ!!」

まだ日の開けきらぬ河原を不審者が走っていた。

煌めく様な金髪を短く刈り込み、無駄に目力の強い三白眼とガツシリとした顎、少年の癖に世紀末社会でも生きて行けそうな鍛え上げられた体。

具体的にはスツキリとした w a g i 先生の原画的世界に行従妹先生的劇画風な場違い感溢れる少年だ。

「ふう、聖帝マラソンへの道は遠いな」

意味を知っていてもいなくても意味不明な独り言を吐きながら少年、南斗天は1.5リットルのスポーツドリンクを一息で飲み干す。何と言うかこの顔で飲み物をガブ飲みする姿は悪役にしか見えない不敵さと威圧感があった。

「へ、へうう……」

今日は日曜日。家庭事情と身体的特徴から虐められ、仲間外れにされている孤独な少女、小雪はいつも楽しそうに遊ぶ同年代の子達に今日こそは仲間に入れて貰おうと意気込んで来たが即効心を折られて半泣きになっていた。

大人でも声をかけるのを躊躇うスキル威圧持ちの劇画風世界観な少年が居れば、草むらに隠れて涙をこぼすのも仕方無いが。

「ん、お前どうしたんだ?」

そこにバンダナを頭に巻いた少年を筆頭として、少年達がやって来た。

「へうっ!?!」

後ろから突然声をかけられ硬直する小雪と、

「誰か居るの、か……!?!」

小雪に声をかけた少年達も硬直する。

先程までスポーツドリンクをがぶ飲みしていた天が見ている。何と言うか視線（物理）と言わんばかりの凄い勢いのガン見であった。

バシユン

と爆発した様な音を立てて天の持っていたスポーツドリンクのペットボトルが弾けた。

硬直した体をビクリと震わせる少年少女達。

ポタポタと指の間から液体を滴らせ、こちらを見る天の顔が徐々に変化していき、三白眼の目はそのままに口だけが弧を描く。

笑うという行為は本来攻撃的なものであり、獣が牙をむく行為が原点である。

そんな一文が頭に浮かぶのだった。

「アホかお前は！」

凄いい勢いで空中を滑空して、黒髪の少女が天を横から蹴り突き刺す。

「ぬおおっ!?!」

横腹からくの字に折り曲がり、シユールな形で吹き飛んでいく天は最後にバシャーンと派手な水音をさせるのだった。

「フハハ、フハハ、フハハ！」

只今、天が両手を翼の様に広げ空を左右に滑空しています。しばらくお待ち下さい。

「すまん、あいつの変な行動で驚かせて……いや、大抵の奴は見た目だけでも驚愕するんだが」

申し訳なさそうに頭を下げる黒髪の美少女、川神百代。

「い、いいよ俺達もビックリしただけだし。あんたは学年も上だし助けて貰ったからな。むしろお礼を言いたいくらいだぜ」

バンダナを巻いた少年、風間翔一は朗らかに笑う。

「ふふふ、運命の出会いってやつかもな」

「格好よかったぜ、あの飛び蹴り。俺様もやってみるか」

ニヒルに笑う直江大和とアチョー、と百代の真似をして横蹴りをし見せる肩幅が立派な島津岳人。

「フハハハハハ、帝王に構えは無いのだ！うむ、乾いた」

そこに滑空している途中で急に仁王立ちになり、ストーンと垂直に落下する天。

「い、今のおかしくない？物理学的に」

引きつった顔で線の細い師岡卓也が疑問を口にするが、

「出来るのだから仕方あるまい」

「まあ、こう言う奴だから気にするな」

天と百代にスツパリと言いい切られて沈黙した。

「う、あ……あうう」

少し距離を取り、髪も肌も真っ白で赤い瞳をした小雪は手を伸ばしかけては引つ込め、声をかけようとしては言葉にならずオロオロとしている。

それに気付き、天が

「むっ、貴様も年下の様だな。挨拶をしろ、挨拶を」

と、ウザい先輩風を吹かし始めた。

「大体、髪を脱色し過ぎて白になるとはどれだけの凝り性だ。第一、貴様臭いぞ。風呂に入って居るのか風呂に。修行中ならともかく、体を洗わぬ輩は帝王たる我の前に立つ資格も無……」

「はい、黙れ！」

グキン、と天の首を後ろから真下へ回す百代。

首の骨が枯れ木を折る様な音を立て、天は白目を剥く。ちなみに正面に居た小雪とは反対側に体を回転させてからだだったので、そちらに居た少年達にはホラー映画並の残酷映像が展開され、悲鳴の大合唱となったが。

「お前、デリカシーの無さが酷いぞ。女の子に向かって臭いだの何だの」

「ふっ、臭いものは臭い」

回復の早さもずば抜けて天が首をコキコキと鳴らしながらニヤリと笑う。完全に悪役である。

「いい加減、初めて会う人に人見知りして緊張する癖を直せよ。さつきだつて、緊張し過ぎてペットボトル握り潰しただらう？」

「ふっ、百代よ。人見知りだから初めて会う人には緊張するのだ。簡単に直せたら苦労はない」

この帝王、どや顔である。

「全く、こんな娘まで怯えさせといて……そう言えばお前、名前は？」

百代に話しかけられ小雪は今日初めての笑顔を浮かべた。

「小雪、ボクの名前は小雪だよっ!!」

何やかんやで知り合った彼等は七人で集まり遊ぶ事が増えた。

特に意外な事は天が小雪の面倒をよく見た事だろう。

何事につけ、言葉足らずでどんくさい面のあった小雪を

「帝王の足を引つ張る輩に我が周りに侍る資格無し。体力をつけろ、体力を！」

とランニングに誘ったり、

「貴様に足りんのは知識だ。頭の回転は悪くないが、勉強をしろ、勉強を！」

と学校の宿題を手伝ったりしていた。

後に大和や百代達は述懐する。

「天は酷いツンデレだった」と。

さて、そんな日々の中でとあるイベントが小雪を悩ませていた。

それは、友達のお宅訪問。

気軽に行ける家から気兼ねしてしまう家まで様々であるが、小雪の家は母親が小雪を虐待するわ、片付いてないわ、お茶請けのお菓子なんど勿論無い非常にランクの低い家である。

家での接待ランクが友達コミュニティのヒエラルキーを決める以上、小雪は是が非でも我が家に友達を招きたくなかった。

しかし、子供はそこら辺の空気を讀まない。いや、讀めないのだ。特にこの少年は。

「ほう、ここが小雪の家か」

相変わらずの不遜な劇画面。我等が帝王は今日もふてぶてしい悪役顔である。

「う、うん。狭くてゴメンね?」

既に侵入済みである。小雪は母親がいつ帰って来るか気が気ではなく白い顔を青くして伏せている。

「ふ、屋根があり雨風に打たれない立派な家ではないか」

意外なお褒めの言葉に顔を上げる小雪。

普段の天ならば

「茶菓子位は出さぬか、この下郎！」

位は言い兼ねない。実際、川神院に行った時に一度言っている。

「勝手に居座った居候の癖に何様だお前！」

と百代に吹き飛ばされていたが。

驚きに目を見開く小雪に天は

「なに、我が師足るサウザーと修行をしたのは山奥だったからな。家など無かつたものよ」

山奥で修行するからと言って家に住まないと言う理屈は成り立たないが、小雪には修行をした経験は無いので、そーなのかー、と言った具合である。深刻なツツコミ不足。百代の存在プライスレス。

「小雪、誰か連れ込んでいるのっ！」

ヒステリックな叫び声に小雪がビクリと体をすくませる。小雪の母親は旦那に逃げられるわ、小雪の特徴的な外見にストレスを感じて小雪を虐待するわ、の駄目親まつしぐら。今も知らない子供を連れ込んだ小雪を叩こうとしたが、その場に居合わせた相手が悪い。天は最も愛深き男に育てられた男、否、漢。そんな漢の前で小雪を叩こうとすれば、その手を掴み

「なつてない、なつてないぞ！小雪の母君よ。小雪は未だ修行を始めただばかり。そんな強さで叩いては無駄に肌が傷むだけよっ！」

と、勢いを弱めてペチリと小雪の頬に小雪の母親の手を当てる。

「えっ、あれ？」

事態が掴めない小雪母。

しかし、天は満足そうに。

「ふむ、小雪よ」

「な、何かな？」

母親に叩かれると思ったら、久し振りに母親の手が頬に優しく置かれた手が温かいなあ、とか思っていた小雪は意識を天に戻しながら答える。

「貴様の母親は修行のつけ方が下手くそのようだぞ」

呼び方が母君から母親になっている辺り、修行をつけるのが下手くそ相手は天にとってヒエラルキーが低くなる要素らしい。実にどうでもいいこだわりである。

「我はお師さんに愛深く修行をつけて貰い、今では立派に帝王邁進出来るまでになった。修行は大事、これは判るな」

「え、大事なのかな？」

小雪がツッコまざるを得ないレベルの天の突飛な話について行けず小雪の母親は放心状態である。

「そこで、フッフ、そこでだな」

いい事を思い付いた悪役顔でニヤリと笑う天。小雪の母親はこの時点で涙目である。

「帝王に付き従う者は強く賢くなければならん。小雪がもし、望むなら我は面倒だが、非常に面倒だが……」

偉そうに背を仰げ反らせ、チラチラと小雪を少し頬を染めながらチラ見して、

「我が毎日、修行をつけてやろう。この家で」

「この家でっ!!?」

小雪の母親が絶望の声を上げ、救いを求める様に小雪の方に視線を送ると。キラキラした瞳で天を見つめる小雪の姿が。

(あ、これはあかん流れだわ)

小雪の母親が人生修了の旗をかかげると、小雪が嬉しそうに天に抱き付くのはほぼ同時であった。

小雪の母親が精神崩壊して、小雪が養子に出される二週間前の事であった。

「うむ、小雪の脚力には天性のものがあるな」

「ほんとおっ!?天にも勝てる?」

「脚力だけで我には勝て……いや、南斗のあの男ならばやりかねんな」

「わっほーい、ボクその人に修行つけて貰うよっ!」

「まあ、良いか」

後に南斗のぶっぱ獄屠脚の小雪、通称、小こ様さまの誕生に繋がるのであった。

「うちの弟子が獄屠『拳』をちやんと使ってくれない」

などの名物スレの元になったとかならなかつたとか。

川神は誰かの犠牲の上に成り立って今日も平和です。

03 帝王強襲

『青葉香る今日この頃、君は元気ですか。我は帝王邁進しています』
そこまで書いて天はティーカップを持ち上げ、中身を飲み干す。

「ふう、小雪に手紙を書くのも何度目かな」

小雪が養子に貰われてから数月が経っていた。

「ふふふ、手のかかる妹のようなものか。だが、悪くない」

センチに憐く笑い、天は再び筆をとる。

「さて、百代が秘密にしている自作ポエムでも書き綴ってやろう。フハハハハハ、大作だぞ笑えるぞ！」

高笑いを始めた天の後頭部に迫る拳。

川神百代、後に武神と呼ばれる少女の掛け値無しの本気の一撃であつた。

「全く人の嫌がる事しかしないなお前は」

「他人の不幸は蜜の味……」

ボソリと呟く天に百代が拳を振りかざすと、目をつぶって身を縮めプルプルと震え出す帝王。

「と言うか小雪なんか何時でも会いに行けるだろうが」

養子に貰われたとは言え、同じ川神市に住んでいるのである。

「そんな、女の子の家に勝手に勝ち負けしてお邪魔するとか恥ずかしいし」

両手の人差し指の先を突き合わせて頬を染める天。

そのキモい姿に呆れながら百代は

「初めて小雪の家に行った時は舞い上がっていたからなあ……」

自分と初めて会った時に、緊張と失血の余り気絶した事を思い出し深い溜め息をつくのだった。

天が肩パット付きのマントを羽織り、街中をズン、ズン、と地響きを立てて歩いている。

別に体重が重い訳ではなく、威厳を見せつけるためである。将来的には違法改造バイクに玉座を載つけてそこに座る予定だが、勿論彼は免許を取れる年齢ではない。声と外見は免許資格年齢を余裕で越え

てそうだが、あくまで彼はまだ小学生である。

「土産も身繕った。小雪も喜ぶであろうな」

最近、百代と一緒に遊ぶ後輩達がお薦めしてくれた和菓子屋の紙袋を揺らし、天は満足げに頷く。今日は小雪が養子に貰われた家へ遊びに行き、修行の成果を見る約束をしている。

南斗孤鷲拳（なんとこしゆうけん）と呼ばれる天とはまた別の流派で、手刀でコンクリートを切り裂き、指でコンクリートを貫く達人が小雪に修行を付けているのだが、本名がシンなのに弟子からキングと呼ばれてたり、流派の名称の由来を聞いても

「……何かいつの間にか、そう呼んでいた」

と、不安な面が多々あるが実力は世界でも指折りである上に常識的な性格なので、天の師匠であるサウザーも信頼していたと聞いて小雪を頼んだのだ。

修行は厳しいが、シンは優しく頼もしいという話を小雪から聞いているだけに天も安心してはいる。しかし、可愛い妹分の上に、二週間だけは言え初弟子として修行をつけた小雪には人一倍情が深くなり、何事につけ会いに行く機会を設けている。

今日も小雪に会える楽しみに口が自然と綻ぶ天である。

ちなみに三白眼で目力は強いままで口角だけ吊り上げる顔は、

「貴様の死に場所はここだ」

と言わんばかりの悪役顔である為、周りの人間はドン引きしていた。

数時間後、小雪の両親に土産を渡し、小雪とは手合わせという名のイチャラブをして天は帰途についていた。

サウザーが女性の扱いを苦手としていたせいか、天も女性相手には緊張しやすいが小雪とは自然に会話出来ている。

天の外見と渋く重い声にビビらない人は居ないが、小雪の両親も気易く接してくれた。善き日であった、と天が感慨にふけっていると「うしやらー、ハンカチ置いてけやあー！クンカクンカさせろお！」

「うひはー、可愛いじゃねえかお兄ちゃんって呼んでくれよー！」
「ブヒイ、ブヒイ！」

と道から逸れた路地裏から世紀末モヒカンチックな叫び声が聞こえてくる。

「チツ、下品な奴輩どもめ」

普段なら聞き逃す音量だったが、小雪と会い現在の境遇に安心し、心安らかになっていた天にとってその雑音は聞き逃せるものではなかった。

誰だつて、ジブリの音楽を聴いた後に中途半端なビジュアル系バンドの音楽は聴きたくない。その程度の不快感が川神院に向かう天の足を路地裏に向けさせた。

だが、薄暗い路地裏に広がっていた光景は天が想像していたものとは大分違っていた。

倒れ伏す鋏付きの露出が多いパンクロックな半裸の男達と、風鳴りをさせて鞭を振る少女とその後ろに顔のよく似た獣の様に敵対的な意思を宿らせた瞳の少年一人に少女が二人。

荒事を予想して肩パット付きのマントを脱いでいた天は黒い鋏付きの露出が多い服。

端的に分かりやすく状況を説明しよう。

少女の持ち物ををクンカクンカしようとした変態を自力で退けた姉弟達の前に、先ほどの変態の親玉っぽい同系統の服装をした男が現れました。

ちなみに天は初対面の女の子の前に緊張して、目力マックスで眉間に皺を寄せ、変態共を

「役に立たぬ雑兵共よ。我が自ら手を下すしかあるまい」

と言った感じで見下しています。

「あんたが親玉かい!?辰子やちまっつていいよ!!」

「うぐるああああ!!」

敵対意識全開で襲いかかる姉弟達。

突然の予想外の事態にゲームの主人公なら驚き、ボコボコにされて

そこから始まるラブストーリー、だが

「ほう、我と闘おうと言うのか。面白い、貴様の強さを帝王自ら検分してくれるわ、フハハハハハ！」

悪役ノリが骨の髄まで染み込んだ天に隙は無かった。

数秒後、路地裏で背を仰げ反らせ高笑いをする天と倒れ伏す哀れな姉弟達の姿があったとき。

「く、くそ変態の癖に強……いい」

ガクリ、と力尽きる鞭を振るっていた少女。その姿を見て天は「むう、手加減を誤ったか。現代っ子は軟弱だな」

現代っ子ど真ん中が何やら言っているが、お気になさらないで下さい。

その後、鋲付きベルトで姉弟達を体に巻き付け、川神市を翼を広げた大鷲の様に飛行する天と付属品として高笑いがエコーしたせいで大騒ぎになり、川神院にそのまま侵入しようとした天を、

「今じゃ、モモ。パワーを星落としに！」

「いいですとも！」

と鉄心と百代の合体技で打ち落とされたとか。

未確認飛行物体を撃墜した川神院に市民は

「流石、川神院何ともないぜっ！」

「川神院があれば何でも出来るうー！」

と大絶賛したとか。同市内にお住まいの直江某さんは

「酷いマッチポンプを見た」

と家族団らんの夕食で愚痴をこぼしたとか何とか。

「ふう、我が庇わなければこやつら死んでいたぞ」

夢とロマンの合体技に撃墜され、黒焦げというか最早炭化しかけながら天がムクリと起き上がる。身を呈して自ら制圧した姉弟達を守ったが彼らも若干焦げ目がついていた。

「うるさあーい、お前がお前が!!」

「こ、こら百代。ストーンピングは止めろ！」

貴様と鉄心のテレツターのせいで瀕死に……ガフツ！」

涙目の美少女に血だるまにされ、更に踏み潰されていく帝王。

「まあ、知らない他人を殺したかも知れないと知った時の百代の錯乱っぷりは痛々しかつたからね。天は少し反省するべきヨ」

未だ気絶したままの少女と少年達の脈を取り、手際よく応急処置をしていくルー師範代。ちなみに釈迦堂は離れた所で腹を抱えて爆笑している。

「しかし、本当に危なかったのう。今後は天は空中飛行禁止じやな」

止めどなく溢れる冷や汗を拭きながら、鉄心は荒ぶる心臓の鼓動を治めるのに一杯一杯であった。危うく一般人を惨殺しかけたのだからむべなるかな。

その頃、元凶は百代のストンピング地獄で放送出来ない有り様に成り果てていた。

「ハー、はぁー、はー……流石にやり過ぎたか？」

「ジョインジョインセイテエー。さあ、第二ラウンドだ百代よ。体力マックスの我を止められるかな？」

「死ねよやぁー！」

「むう、あれは川神院が奥義！うばぁー!!」

攻撃一辺倒の柔らか聖帝ことサウザーの弟子、南斗天。彼もまた豆腐並の防御力の持ち主であった。

04 帝王敗北

さて、瀕死に焦げ目がついて運び込まれた板垣一家。治療と平行しつつ、身元捜索をした所、両親は失踪、家は治安の悪い親不孝通り、と不幸が連続コンボをかまし、更に普通の施設に預けるには次女の辰子はずば抜けた怪力を持ち、他の姉弟達も少なからず腕つぶしが立ち、性格も癖があるというボーナスまでついたため問題を起こすのは確実であった。

かといって

「川神院で預かるのは駄目なのか？」

腕相撲を初めとした力較べで全力を出し合える辰子を百代は人一倍気に入っていた。

「川神院はあくまで武の高見を目指す場所じゃ。保育所ではないからの」

鉄心の鶴の一声には泣き寝入るしかない。

「二人増えても二人増えても同じだろう。器が小さいな川神鉄心よ、フハハハハハ！」

高笑いする天を指差し、百代は

「アレはいいのか？」

「川神院以外でアレを止められるのかの？」

「むう、厄介だなアレ」

川神一族に厄介者扱いされる天であった。

「ふむ、ならば我が師の知り合いに頼んでみるとしよう」

板垣一家の扱いに頭を悩ませる川神院に天が珍しく建設的な意見を吐き、一同の顔を曇らせた。

「また南斗か」

小雪が最近、天に似て飛び蹴り連打で空中飛行し始めたと聞いて頭痛がしたばかりの川神院一同である。

「いや、南斗は手の開いている者がいないのでな。北斗に頼むつもりだ」

天の言葉に鉄心は頭上でハテナマークを出す。

「北斗とは北斗神拳のことか？ 確か南斗とは敵対していなかったか？」

「古い話よ。我が師がその垣根を取り払ったと聞いている。電話を借りるぞ」

スタスタと廊下を歩き設置された電話のボタンをプッシュし始める天。完全に我が家の様な振る舞いである。

「あー、我だ。何、帝王足る我の声……おう、ジャギ殿かすまん。ヘルメット越しでは仕方あるまい。何、お互い様よフハハハハハ！」

何やら和気藹々と会話し始める天に意外な社交性を発見し、驚く一同。

「ならば一週間後に。うむ、ラオウ殿やトキ殿にもよろしく頼む。ケンシロウは、まあ適当に。そうだ、フハハハハハ、あやつはそれ位でないとな、フハハハハハ！」

ガチャンと電話を切り、スタスタと一同の元に戻る天。

「話を通ったのかの？」

鉄心の言葉に

「うむ、あちらは北斗の四兄弟で来るそうだ。こちらも四人身繕わなければな」

「ふむ、板垣姉弟は丁度四人じゃからな」

鉄心の返事に天は眉をしかめり。

「何をボケている川神鉄心。あの武術の武の字も知らぬ奴等に北斗神拳の相手が務まるものか。我の他に三人川神院から腕利きを揃えるがいい」

憤然と言い放つ天に川神院は一瞬の沈黙の後、絶叫に包まれるのだった。

天を一人五発づつ殴り、落ち着いた一同。

天は四発辺りで体力ゲージが尽きる為、治療されては殴られてを繰り返していた。

「ぐふっ、貴様らこんな力を隠していたとは……」

「あー、天君。大人しくしてなさいねー」

辰子に押さえ付けられ、天使や龍兵に包帯をグルグル巻きにされている天。亜巳は天の急所に指をめり込ませて起き上がろうとする度に指を深く刺し、グフフ、とかガハツ、とか悲鳴を上げさせては頬を赤くして息を荒げている。

「さて、北斗神拳について知っている者はおるかの？」

鉄心と釈迦堂以外は互いに顔を見合わせる。

川神院は武の総本山だが、クリーンな面が強く裏社会には通じていない所がある。表に出れば叩き潰せるという強さがあるのも、それを助長していた。

「あー、伝説の暗殺拳ってやつかあ？」

一人、釈迦堂のみは伝え聞いた事があるらしい。川神院に入る以前は、裏社会にも名を知られていた経歴があると言われている男の面目躍如か。

「うむ、指一本で人を死に至らしめる最強の暗殺拳。南斗鳳凰拳のサウザーとの対決こそ避けたいらしいが、他の南斗の流派は悉（ことごと）く敗れたとか」

南斗と言えば愛深き男サウザーを筆頭に鉄心と協力し、裏社会を安定に導いた伝説的存在である。それを圧倒する者とは……戦慄する一同に

「喝っ！」

鉄心の喝が飛んだ。殆どの者が体を硬直させる中で、師範代二人はゆったりと座り、しっかと鉄心に視線を合わせている。

「ふむ、やはり釈迦堂とルーか」

顎髭をしごき、キラリと瞳の奥を光らせる鉄心。

「当然だぜ。伝説の暗殺拳、相手にとつて不足はねえ！」

「川神院の師範代として恥ずかしくない試合にするヨ」

釈迦堂はともかく、ルーも珍しく好戦的に闘気を立ち昇らせて語尾を強くする。

「うむ、儂を含めて四人で北斗神拳に、武の本懐はは川神院にありと見せつけるのじゃー！」

「応っ！」

と団結する一同。

その横で包帯によって気道を防がれ、手足を生まれ持つての怪力で押さえられ、急所に深く指を刺された将星の輝きが消え去ろうとしていた。

「おや、南斗極星の横に死兆星が」

北斗神拳伝承者の一人が異変に気付いたが、物理的に距離が離れすぎて何を出来るでもなかった。

以外、ダイジェスト。

「北斗神拳は秘孔を突くのが奥義。離れていればこちらの勝ちよ、行けよリンググウ！」

「天破活殺（てんはかつさつ）！」

「な、何い!？」

「やるね、私の早さについて来れるとは驚きヨ」

「激流を制するは清流……さあ、行くぞっ！」

「この拳王の剛拳に耐えられるかな？」

「ぐう、流星は北斗神拳か」

「否、貴様の前に立つはこのラオウ。拳王の一撃と知れっ！」

「ひゃくはっはっはっ、俺の名を言ってみろー！」

「ガ、ガソリンとかありか!?!熱い、熱、熱い!!」

「フハハハハハ、所詮貴様らは雑兵の拳。我が帝王の拳の前には悉く制圧前進あるのみよっ！」

「くっ、天翔十字鳳まで使うとか馬鹿なのか。お前、奥義だろうそれっ!?!」

「フハハハハハ、フハハハハハ!!」

最終的には何か乱入してきた天を全員がかりで鎮圧して友好を深めました。

板垣一家は長女の亜巳は北斗神拳史上最も華麗なる技を持つトキに、次女の辰子は類いまれなる剛拳を誇る北斗最強のラオウに、龍兵と天使は武器も南斗の拳も使う何でもありのジャギに弟子入りする事となった。

ちなみに北斗神拳の正当伝承者であるケンシロウは数合わせで付き合っただけらしい。

天は板垣一家に感謝される事もなく、ボロクズのように道場の隅に転がされ、別れの言葉もなく彼等と別れるのだった。

「おーい、天。夕飯できたぞー」

「ぐっ、体が動かん。おのれ、北斗の奴等め容赦なく秘孔を突きおつて。この屈辱、必ず返すぞ！」

悔し涙を流し、歯ぎしりをする天。

南斗と北斗の新たな因縁が生まれたのだった。

05 帝王入学

時は流れ天と百代は中学生へと進学していた。

義務教育より武者修行だろう、と頭悪い発言をする百代を鉄心は「強さへの求道にはやる気持ちは判るが、お主の横に居る奴に勝てる様になってからじゃな」

百代が横を見ると瞳孔が小さくなった三白眼で、口だけ大きく開いて笑う天の顔があつた。

ウザいので目潰しした百代を誰も攻められまい。

新しい環境では何事も新鮮な気持ちで挑めるものだ。百代も新たな気持ちで川神院を出たのだが、

「なあ、天」

「何だ百代」

百代は白のセーラー服に黒いスカートを巻いたシンプルながら洗練されたデザインの制服を着ている。最近、とみに体も成長し髪も伸ばした百代は女性的な体型になってきた事もあり、美少女と言った単語そのままに当てはまる。

対して天は元々高い背に筋肉が盛り上がり、顔つきも更に線が濃くなった衿詰めของ学ラン姿である。

さながら、百代はマガジンの爽やかスポーツヒロイン。天は粗いGペンで描かれた熱血ど根性バトルのボス役と言った所か。

「年齢詐称してないんだよな」

「この前、ケーキに十二本口ウソクを立てたばかりではないか」

「そうなんだよな……」

新たな学生生活に不安しか湧かない百代であつた。

そして、中学の入学式からしてその不安は的中するのだった。

「フハハハハハ、我、降臨である！」

天ではなく、額にバツテン印の傷がある美少女が高笑いしていた。

「フハハ……」

「よし、混乱するから黙れ」

対抗意識全開で高笑いしようとした天を百代の正拳が襲う！

ガツシ、ボカ。

帝王は頭にたんこぶをこきえて、悔しげに歯軋りをしている。

「新入生諸君よ、歓迎しよう。我は九鬼（くき）揚羽（あげは）、二年生である！」

本来なら生徒会長が挨拶をすべきであるが……」

「揚羽さんの方が皆、喜ぶでしょう？」

「と、推薦されてしまったては断る術も無い。わずか一年だが人生の先達として君達に忠言しよう」

マイクを手放し、揚羽は一際深く大きく息を吸い込み真っ直ぐと新入生達を見据える。

「人生とは戦場である！」

爆音。そんな比喻がそのまま当てはまる声の大きさ、そして

「勝つてこそ得るものは多く、負ければ取り分は少ない！貧すれば鈍する、富めば更に高見を目指せる！新入生諸君、勝てよ何事にも勝て！さすれば君達の学生生活は豊かに美しく華々しく、楽しいものとなるだろう！」

体育館全てに響き渡る演説をし、揚羽はマイクを再び取る。

「負けていいのは購買の限定プリンだけである。あれは値段が高いが美味である。早い者勝ちなので勝ち取るのは難しいがな」

精一杯のジョークであったのだろう。しかし、事前の演説が強烈過ぎて体育館の中は時間が止まった様に空気が凍っている。

その空気に壇上で赤面し、拳を握りしめて体を震わせる揚羽。

「小十郎!!」

「はい、揚羽様あ〜！」

舞台袖から飛び出して来る髪が全て跳ね上がり、ウニの様になっているトゲトゲ頭の少年に

「滑ったぞ、馬鹿者がー！」

「申し訳ありません、揚羽様あ！たわらばあ！」

罵声と共に揚羽の拳が突き刺さり、少年は面白い様に吹き飛ばぶのだった。

「……なかなか面白い御仁だな」

「フハハハハハ、良き余興である。だが、足りんまだ足りんぞ。この帝王をもっと楽しませ……」

「うるさい」

先程の少年の様に愉快的な錐揉み回転で吹き飛ばす天。

舞台と客席から吹き飛ばす二人は空中で交差し、

(貴殿は……)

(貴様は……)

『何処か似ている』

と、妙なシンパシーを感じつつ反対側に吹っ飛んでいくのだった。

これが後に言う、絶対的一強だった九鬼揚羽の中学時代が後の武神・川神百代と、聖帝・南斗天の介入による三國志風三つ巴世紀末的戦国時代の幕開けであった……。

「嘘……だろう」

「フハハハハハ、まあまあだな」

百代と天が成績表を手に対照的な表情をしていた。

勝っていたかと思っていたら実は負けていたかと言う様な驚愕の表情の百代と、自信満々に成績表をかざす天。

「そんな馬鹿な、私並みに修行漬けのはずの天が何で……」

ガツクリと両手を床につけて落ち込む百代。

「お師さんに一から教えて頂いた勉学の種を枯らすのは私の信条に反するからな。授業中に寝たりはせん。川神院では勉強はしていないがな」

努力家の癖に天才肌の帝王である。ちなみに250人中89位と決して高い成績ではなかったが、百代のぶつちぎり最下位よりはマシだ。

「大丈夫かいな百代は」

「武者修行に行けない鬱憤を川神院での修行で晴らしていたからネ。天は師匠が良かったヨ」

「ベンキョーなんか役に立たないだろうになあ」

鉄心とルーは自身も教育者である為に百代の先行きを心配しているが、釈迦堂はアクビをして気楽に寝転んでいる。

「フハハハハハ、我、降臨！」

と、そこへ仁王立ちした額にバツテン印の傷をつけた少女が現れた。

「チッ！」

明らかに不機嫌になつて舌打ちする天。

「むっ、百代は赤点か。天は可もなく不可もなく。フハハハハハ、勉強も武も我の圧勝であるな！」

ご機嫌に高笑いをする九鬼揚羽の横には金髪執事が然り気無く立っている。

「ふん赤子が低レベルな争いをして一喜一憂するとは、片腹痛い光景だな」

ヒューム・ヘルシング。

川神鉄心と共に世界最強を二分する無敵執事である。

「ほう、ヘルシング殿は我を赤子と言うか」

低いビートのBGMをバックに仁王立ちに入る天。

「噛みつくな狂犬」

ズドン、と脇腹に一撃を入れられて声も出さずに地に伏した。

「お、おう。川神百代よ、南斗天が白目剥いているが大丈夫か？」

人生これ豪快がウリの揚羽もドン引きの早業に百代は鬱陶しそうな顔で

「こいつが高笑いを始めたら私じゃ止められなくなりますけどいいですかね？」

「は、まあ？良いのではないか？」

じゃあ、と天の頭を軽く叩く百代。

「むう、百代よ。最近、拳に殺意が乗りすぎではないか？精神修行に座禅を組むか我と制圧前進しようか？」

「座禅と制圧前進がどう繋がってるのか良く判らんが、揚羽先輩からキャラ被りの許可が出たから笑っていいぞ」

百代がそう言った瞬間、全てのしがらみから解き放たれた様に天は無邪気に笑った。

「フハハハハハ、先輩の顔を立てて一人称はともかく高笑いはい我慢し

ていたが許すというなら遠慮は要らん！」

「壮大な聖帝のテーマと共に輝かしいばかりに充実した闘気を体中から放ち、仁王立ちになる天。」

「さあ、揚羽先輩にヘルシング殿。我に敗北を刻んでみせよっ！」

「お、おう。行くぞ、南斗天よ！」

「何だこの茶番は……」

会心の悪役笑顔を浮かべ、最速の踏み込みと全てを切り裂く手刀で斬り込んでいく天。

大きな構えから人間離れた一撃を繰り出す揚羽とあらゆるモノを引き裂く足技を蹴り出す三人の闘いは数時間に及ぶのだった。

「ふふふ、南斗の道は潰えたか……」

数時間後、そこには力尽きた天の姿が！

「何で満足気なんだこやつは」

「間違いなくサウザーの弟子だな」

「師匠からしてこんなんか」

揚羽、ヒューム、百代の呆れた視線を受けながらやり遂げた男の顔で目をつぶる天であった。

06 帝王不覚

波乱含みで始まった中学生生活。

大方の予想を覆して、帝王こと南斗 天は恙無（つつがな）く学生生活を満喫していた。

「フウーハハハハハ！アンパンは我が全て頂いた！甘味は正義、いい時代になったものよ!!」

両手を翼の様に広げ滑空しながらパン食い競争で吊るされたアンパンを全てかっさらったり。

「ククク、さあ聖帝軍の偉容を見せつけるのだ！全体前へ進め！」

無駄に高い統率力で棒倒しの棒の上に派手な椅子を乗せて腰掛けたり。

「フレツ、フレツ、赤組！頑張れ、頑張れ、赤組!!」

応援合戦をするチアコスの女子生徒をチラ見したり、と青春を謳歌していた。

「今日は運動会なんだよ」

「小雪よ、誰に言っているのだ？」

「神の視点的な読者にだよー」

応援に来た小雪を含めて昼食タイムなのである。

「天は凄い活躍してたね、格好よかったよ！」

「フハハハハ、まあ我に任せておけば全てよし！帝王に敗北は無いのだ！」

和気藹々（わきあいあい）と小雪も手伝って作った弁当をつつきながら談笑する天と対照的に、百代の周りに集まった風間ファミリーは気落ちした空間が漂っていた。

「ね、姉さんも食べなよ。岳人のかーちゃんが作った弁当めっちゃ美味いぜー！」

「マジか、マジだ！めっちゃ美味え！」

「キ、キヤップまずは姉さんに食べて貰いなよ。ああ、半分も食べちゃってもうー！」

どよーん、とした空気を醸（かも）し出す川神百代を元気付けよう

とする直江大和と師岡だが、風間翔一が微妙に空気を読めていなかった。

「くそっ、運動会なら天下一武道会で充分じゃないか」

ギリイ、と歯噛みする百代。

午前中の競技は玉転がしや棒倒しなど駆け引きや技術が必要な種目が主流で、短距離走や綱引きなどの身体能力がモノを言う競技はほとんどなかった。

去年まで小学生だったとは言え、生まれ持った桁違いの気や身体能力を誇り川神院で修行を積んだ百代はそれこそ世界記録を量産する剛腕、健脚の持ち主だが、手加減とかがすこぶる苦手であった。

大玉転がしは最初の一押しに気合いを入れすぎて大玉が破裂。スタート開始同時に失格。

障害物競争は勢い余って障害物を蹴散らし、失格。

パン食い競争は天翔十字風を繰り出した天に全てかっさらわれて、リタイア。

結果、全くといっていいほどに活躍出来なかったのである。成長期に伴い身体と気が爆発的に伸びている百代は、はつきり言って自分の能力を持て余していた。

特に実力的に近い天が同じ成長期にも関わらず、自分の体を見事に乗りこなしているのを見せつけられると焦りも感じる。まだ見ぬ強敵を求めて武者修行を夢見る百代としては、鉄心が天と自分を見比べて百代の未熟さに首を横に振っていると強く感じているだけに焦りもひとしおであった。

イライラも極限に達しつつある百代の元へ、更なる追撃の刺客が舞い降りる。

チャツ、チャツ、チャララー♪

軽快なラップサウンドをBGMに背中を伸ばして斜め45度にかしがせ、左腕を腰に巻き付け、腰元に親指を立てたいわゆるサムズアップの右手を添えた許されざる角度と言われる伝説の煽りポーズを小刻みに左右に振りながら、口だけ大きく開き、目は三白眼の全く

笑っていないいつもの笑顔で近づいて来る天。横に真似をしている小雪も伴っている。その有り様はひたすらにウザいと断言出来ただろう。特に感情が鬱屈してイライラしている人が見れば

「何やら……」

「……ぶっ殺す!!」

何か言おうとした天に言われなき暴力が襲う位には

You win Momoyo!

何故か天を倒すと出るテロップを背景に、体操服の上に羽織ったジャージの裾を風になびかせる百代。

「私は、私より強い奴に会いに行きたい……」

（姉さん、天にいつもワンパンで勝ってる様に見えるんだけど……武者修行に行く許可を貰えるじゃないかな）

（多分、ギャグ補正じゃないかな。ほら、天さんって真剣勝負だと攻撃を避けるのに特化してるらしいし。当たると沈むタイプなんだよ、きつと）

大和が疑問をかもし、モロがゲームと漫画を混ぜ混んだ二次元脳的な超理論を展開する。

概ね、合っている所がトンデモ野郎の天に相応しいが。

「くっ、話を聞こうとしたら殴られたぞ。訴訟も辞さぬ」

「いや、あれは誰でも手が出るだろ」

ブレインマツルの岳人にすら呆れられる有り様。こんな帝王に誰がした。

「まあよい、百代よ。少し付き合えい」

「あー、何だよ……?」

そのまま連れ立って校舎裏に消えていく天と百代を風間ファミリーWith小雪は当然の様に尾行していく。

人目のつかない校舎裏にて

「フハハハハ、この拳が避けれるかな?」

「くそ、ヒラヒラと避けやがって!」

二人だけの天下一武道会が開かれていた。

「あ、あわわ。止めなきやお爺様に怒られちゃうわ」

ガクガク、と体を震わせて顔を青ざめさせる川神一子に落ち着かせる為に京は頭を撫でながら

「大丈夫、私でも見える位に手加減してるから本気じゃないよ」

「えっ、何か分身してるみたい速いんだけど」

「目で追うのがやっとだぜ」

一般人の大和には手加減って何だろなというレベルである。翔一は常人離れした動体視力を無駄に発揮してたりする。

百代が苛立ち紛れに放った正拳は風を切り、空気を捻り、大気を唸らせる。だが、それを天は正面から片手で止めた。

「フン、『気』が入っていないぞ百代よ。やはり、川神院は制圧前進を修行に取り入れるべきだな」

放り捨てる様に百代の腕を投げる天。百代は体が流されるのを防ぐ為に足に力を溜める。結果、体勢を整える前に天に懐に入られ、首元と心臓の右下に当たる脇腹に天の手刀を当てられ硬直した。

瞬間回復という異能を持つ百代と言えど、その技を生み出す『気』の循環に多大な役割を持つ血液の重要器官に致命傷を受ければ無事ではいられない。

「……………くそっ！」

顔を歪め、天に背中を向ける百代。

「……………何を焦っている」

天は珍しく茶化す事もなく真面目な顔で百代を見つめる。

百代は両手に力を込め、拳を作る。

「私はただ強い奴と戦いたいだけなのに……………何故、ジジイは私を川神院に押し込めるんだ！」

ギロリ、とその黒い瞳に炎を宿らせ百代は天を睨み付ける。

「判らない、判らない、判らないんだ。武道家は戦う為に強くなるんだ。毎日、毎日役に立つか判らない様な技を磨き、気を練って、型を体に馴染ませる」

辛い、辛い苦行である。技とはある限定的な一瞬の攻防の為に想定される技術。それを僅かでも早く、羽毛の一撫でに等しい威力でも高

める為に身を削り、魂を磨り減らすまで研鑽しても一生涯使わない可能性すらある。

気を練るのも同様にただ気を高めるだけではない。川神院には炎の様に燃え上がらせ、氷の様に凍結させる特殊な練り方すらある。それすらも必要が無ければ一生涯使わない可能性がある。

型とは人間本来ならば不可能な身体の問題を体に刻み付ける苦行だ。関節は熱を持ち、骨は軋み、筋肉は断裂して激痛を走らせる。百代とて痛みと熱に眠れぬ夜を越えて来た。

それら全てをあるいは持ち腐れさせる鉄心の百代に対する厳しい私闘の禁止。

それは百代の感情を鬱屈させ、精神に陰を落とすには充分であった。

更には彼女の前には常に天が居た。

九鬼揚羽やヒューム・ヘルシングと堂々と渡り合い、南斗最強を謳う男は鬨いに明け暮れているのだ。

そして、間違いなく百代の何歩も先を行く強さを持つ男は自信満々に居丈高に、しかし百代が羨ましくなる位に誇り高く気高く信念を突き通しているのだ。

羨ましい、妬ましい、そんな感情が百代の唇をわななかせ、目に涙を浮かばせる。

「百代よ、何か勘違いしているようだから言っておいてやる」

コホン、と天は一息つき

「我は現状に置いて貴様に勝っているとは思ってはいない。まあ、単純に我が貴様より速く動けて手刀の切れ味が圧倒的に、有り得ないほど圧倒的に上なのは確かだが」

百代が拳を振り上げ、大和達が止め切れずに天が頭にタンコブを作って涙目になったのは割愛する。

「南斗鳳凰拳は帝王の技。その教えを受ける者はこの世に唯一人の暗殺拳。故に敗北はすなわち南斗鳳凰拳がこの世から失われる事を意味する」

敗北は死。

その非情な世界に置いての最強の名は、武の総本山である川神院ですら想像出来ない過酷さがある。

修行中の身とは言え、負けられぬ環境にある為に本来なら基礎を固めた後に伝授する秘技すら未熟な内に己のものとなせねばならない。それは、精神的に未熟な者や才能足りぬ者には歩めぬ修羅の道。

その道を退かず、媚びず、省みず、宿敵である北斗とすら戦後の日本を守る為に手を組み、力を合わせて世界に日本の武を知らしめたサウザーの生きざまは正に天が目指すべき道。

だからこそ、天は退かぬ、媚びぬ、省みぬ。

しかし、

「だが、今は平和の世よ。敗北は死ではなく、次の戦いへの糧である。川神院の教えは良くそれを組み込んでいる」

鉄心も百代が憎い訳ではない。ただ、真剣勝負とは常に自ら命の危険と、負かした相手からの負の感情。あるいは怨恨によって命を狙われる危険性を伴って一生まわりついてくる。

唯一の血の繋がった肉親である孫娘が、その意味を知り覚悟を持つてくれる時期まで手元に置いて見守りたい。そんな、いじましい親心を天は誰よりも愛深き師より受けた教えにより知っていた。

だからこそ、鉄心は百代の横に天を置いたのだろう。幼くして帝王の道を進む事を決意した男の姿を百代に見て貰いたいのが故に。

百代の拳に天は自分の拳を重ねる。

「我は切り裂く拳を極める。時代錯誤と言われようと傲慢と揶揄されようと我が歩く道は既に我が魂が定めた道（ゆめ）よ。百代よ、貴様の拳は我と競って進む修羅の道（ゆめ）か？」

ギョツ、と百代は重ねられた拳を強く握る。

記憶すら定まらぬ幼き頃に夢見た祖父の拳。

それは、真つ直ぐに、この世全てのものに真つ直ぐに差し伸べられた意思を貫く、大きく美しく真つ直ぐな拳、正拳であった。

自らの中だけにあるその偶像を大切に胸にしまいこみ、百代は天に「ああ、そうだな。私はまだお前に私の道（ゆめ）を見せていないんだからな」

恥ずかし気にはにかみながら、花が咲くように朗らかに微笑むのだった。

それは、とても美しく可憐な笑みだった。

「う、うむ。何だ、我也揚羽先輩を初め勝てぬ相手も多い。貴様も我に続いて精進するがよい、フハハハハ！」

「ハツハ、そうだな。お前相手なら手加減も必要ないからな。すぐにお前より強くなってジジイに武者修行を認めさせてやるさ！」

豪快に笑いあう二人だが、普段にはない照れがある雰囲気小雪が頬を膨らませて目を細くして睨みつける。

「ふーん、ふーん。百ちゃんも敵だね、あれは敵だね。いいもん、ボクだって強くなつてやるんだからっ！」

剣呑な空気をもし出しながは、シユツ、シユツと空気を切り裂く素振りをする小雪に京が同属的なシンパシーを感じたとか何とか。

そして、昼食タイムが終わり午後の競技が始まったそこには

「ハツハツハ、どけどけー！私に足を止めさせるなよー!!」

元気に他の競技者を吹き飛ばす百代の姿が！

「お、お姉様が壊れた……」

「何てこつた、何処ぞの帝王みたいになつてやがる……」

風見ファミリーがじつ、と視線を送る先には額に一筋の汗をかく帝王の姿が！

「……あれが奴の本性（しゅら）か。ふふふ、見事な制圧前進よ。我は恐るべき敵を目覚めさせてしまったのかも知れぬな」

「天がやつちまった自覚があるんで、姉さんを止めるのは天の役割に決定しよう。賛成の人は手を挙げてー」

「はい（風間ファミリー+小雪）」

「待てい！多数決はイジメの元になりますよ（根拠はない）。というか、小雪よ。貴様も我を裏切るか！」

「知らないもーん。天の味方になった覚えはないもーん」

「おのれ、我の右腕と頼んでいた者に反逆されるとは……帝王不覚！」
ガクリ、と大地に膝をつき齒軋りをする天の背景では全てを薙ぎ倒

し、ゴールテープを切る百代の姿があるのだった。

「ワハハハ、私の道を阻むものは無い！」

その日、赤組は百代の暴走行為によりマイナス一万点を賜（たまわ）り、二百一点対マイナス九千六百点という歴史的な大差によって敗北した。

ちなみに天も赤組で、閉会式終了後に砂地のグラウンドにて百代と共に正座させられていた。

「なあ、天。私達は何処で間違っただらうな」

「それは我にも計れぬ天の意志よ」

「そっか……足痛いな」

「うむ、気を使うと反省にならぬからな」

夕暮れにグラウンドで並んで正座する二人の後ろ姿は、秋の終わりを感ぜさせる侘しさであった。

「師匠、私に南斗の真髓を教えてください！」

「おお、あの天真爛漫、傍若無人、制圧前進の小雪が綺麗な土下座までして……」

「恋敵（ライバル）を蹴り飛ばせる位に、ボク強くなりたいんだ！」

その日、ネット掲示板にて『弟子が南斗の奥義を恋愛の武器にしか見ていない』というスレが立ったとか何とか……南斗の星は涙に濡れる瞳の様に夜空で明るく瞬（またた）いていた。

07 帝王文化・前半戦

運動の秋は終わりを告げた。

南斗天と川神百代の足に生涯忘れ得ぬ小石と砂利が脛(すね)に食い込む武術家も涙目になる痛みを残して……

「もう、短距離走で他の選手を吹き飛ばしたりしないよっ!」

川神百代は反省してるのか微妙な元氣一杯な姿でそうコメントした。

そして、

「フハハハハ、いらっしやいませー!」

筋肉ムキムキの天がエプロン姿で笑顔を振り撒いていた。

「意外と悪くないな」

「ウソおっ!!」

芸術の秋、文化祭到来!

川神中学において夏休み明けに運動会、間髪入れずに文化祭という流れは例年通りのタイムスケジュールである。

夏休み明けに鈍(なま)った体に渴を入れ、勉強に身を入れる為に愛校心を育(はぐく)む為に全体一致の精神で文化祭を行う。

夏休み明けの全国一斉テストは散々だが、冬休み前には驚異的な偏差値の向上が認められる川神中学ならではのイベント編制である。

運動会での興奮冷めやらぬ文化祭は生徒達の意欲も高く、フリーマーケットやお決まりの展示会でお茶を濁す部活動やクラスの出店は一つも無く、様々な趣向を凝らし、最早奇抜の域に突き抜けた出店が目白押しなのも特徴であった。

天と百代の所属するクラスもその例に漏れず、男子は半袖Yシャツにジーンズとエプロン。女子はヘソ出し短パンの軽装という健康的な爽やか軽食喫茶店で出店をすると相成(あいな)った。

最初は執事服やらメイドさんやらあったが、動きやすさや見た目のイメージ統一をはかり、爽やかさを前面に押し出す戦略に決まったのである。

そんな中、個性を出すために自前のエプロンを持ち寄った結果、筋肉モリモリの劇画顔にピチピチの半袖Yシャツ、ミツシリと筋肉の詰まった逞しいジーンズ、猫の愛らしいアツプリケをあしらったエプロン姿の南北斗鳳凰拳伝承者が誕生したのである。

「いや、頼り甲斐のある酒場の親父みたいな感じでワンチャン……」
「どう見ても荒くれ酒場の暴君だろう……」

ノンアルコールワインを手慣れた仕草でテイステイングし、キュツと一息に飲み干す天。味が気に入ったらしく、映画の最初にマフィアのボスが浮かべる様な悪役感タツプリの笑顔を披露していた。

「まあ、天さんは小さい子にトラウマ与えかねんから、接客は無しだけどな」

「なにイッ！」

驚きに振り返った天がバランスを崩して膝から崩れ落ちるのだった。

テツテレー

時は過ぎ、文化祭当日。

「わー、川神中学は派手だねー」

蒼く長い髪をなびかせて板垣辰子がニコニコしながら出店を見回していた。目線を動かす度にポヨポヨ揺れる双丘に川神中学の男子の視線は上下に動く。

「やべえ、何だあの母性は……」

「川神中学ランキング二大巨頭の揚羽さんと百代ちゃんを上回る、だと!?!」

「はぐれんじやないよ、師匠達から何かあつたら地獄の特訓するって脅されてんだからねっ!」

ギラリと眼光鋭く板垣亜巳が目を光らせる。

化粧こそ薄い、切れ長の目と近づくもの全てを切り裂く様な近づき難い雰囲気があった。

「スジ者のお姉様が何故、中学の文化祭に……」

「姉妹にしちや似て……似て……母性は姉妹だな」

「おい、竜兵。あれ、何かな?」

「……俺に聞くなよ。亜巳ねえにでも聞いてけ」

ピンク色のツインテールを跳ね上げながら、チヨロチヨロとあつちこつちに動き回る板垣天使をTシャツとジーンズのみのかにも不良でございますといった格好の板垣竜兵が面倒くさげに目を細くする。

「あの集団レベル高過ぎだろう。天使かあの娘（こ）は」

「むうう、百代ちゃんの妹の一子ちゃんにも劣らぬ無邪気な笑顔……いいねっ！」

「うーむ、あのゴツツい兄ちゃんがいなきや声をかけるんだけどなー」
何やら注目を集める板垣姉弟達がゾロゾロと進む先には

「ぬえい、南斗回転生地回し！」

「す、すげえ！回転が見えない！電動ノコみみたいな音までしてるぜ!!」
「フハハハハ、いつもより多く回しておりまーす！」

教室の前でピザの実演調理をする南斗天の姿があった。

「あ、久しぶりー」

「む、誰だ？」

辰子がかけた声に顔を向ける天。

「あ、天さん。余所見すると……」

チユイン！

小麦粉から作られたとは思えない音を立てて、ピザ生地が竜兵を襲う。

「はっ？」

瞬間、首を傾げた竜兵の頬を切り裂き、後ろのコンクリートの壁すら切り裂き、半ばまで埋まりながら回転を止めるピザ生地。

竜兵の頬がザックリと裂けて、血が一筋流れ落ちた。

……………

「四名様、いらっしやいませー！」

「ごまかせるかー!!」

いつもの三白眼過ぎ口だけ笑って目が笑っていない笑顔で元気に接客する天に竜兵の怒りの拳が突き刺さるのだった。

何やかんやで、天と百代のクラスが出店している喫茶店に入り、

テーブルに座る板垣姉弟。

「フハハハハ、我のおごりだ。存分に食らい尽くすがいい！」

お冷やを出しながらメニユーを配る天に竜兵はジト目で応える。

「天君、オススメはー？」

早速、メニユーに目を通し始める亜巳と天使と対称的に竜兵は面倒くさげに椅子にもたれ、辰子はテーブルに突っ伏しながら天に顔を向ける。

「……ピザとか？」

「殺しかけた本人を前に、あの殺人ピザを食わそうとするお前がスゲエよ……」

しれっ、とする天に竜兵が深い溜め息をつく。

「あ、そうそう。そう言えば前から言おうと思ってたんだけど」

首を突っ込む様にメニユー表を覗き込んでいた天使が天に顔を向ける。

そして、背中に手を回しスルスルとゴルフクラブを引き出す。

(明らかに背丈より長いような……)

そんな周りの視線を受けながら、天使はゴルフクラブを横に振りかぶり……

「ウチと名前被ってるじゃねえか！このドサンピンがー!!」

野球のバッドを振る様に天へと殺人スイングをぶちかます！

「危ない」

ヒョイとばかりにゴルフクラブを片手でつまみ、何事も無かった様に前菜のサラダをテーブルに並べる天。

天使は天にゴルフクラブを持たせたまま、姉達と共にサラダに手をつける。

「あ、このドレッシング旨いな」

「全然足りねえぞ」

「馬鹿だね。この後にメインが来るんだよ。黙って食いな」

「うー、眠くなってきたよー……」

「フハハハハ、この後はピザとノンアルコールワインとコーンスープを出すからな。楽しみにしているがいい！」

和氣藹々とする雰囲気に天が片手で持つゴルフクラブのシールドさが際立つ。

(ねえ、あれってツツコミ入れた方がいいんじゃないか……)

(入れるべきだが、どこからツツコミむべきか。名前被りのところか、ゴルフクラブを出したところか、天さんがアツサリ止めたところか)

(仲がいいんだか悪いんだか判断しづらいなあ)

手を出したいが出せないもどかしい空気が蔓延する教室とうって変わって調理室では。

「百ちゃん、八番席オーダー完了。セットはこれをお願いね!」

「こつちも完了。教室に持って行ってくれっ!」

「ほいさっ、任せとけい!」

次々と出来る上がる料理を川神百代が教室へと運んでいた。

教室から入ったオーダーを携帯を介して調理室で受け取り、熱々の料理を超人的な速さで百代が教室に運ぶ。

他の出店では真似出来ない本格的な料理と出来たてでの提供を可能とした完璧なシステムは意外にも天が考案したものである。

「我が運べば正に出来たてホヤホヤよ!」

フハハハハ、と高笑いと共に満面の笑みを浮かべるウザイドヤ顔の残像を残しながら料理を運ぶ天の姿は都市伝説のターボばあを彷彿(ほうふつ)とさせ、高笑いの騒音被害も含めて速攻で禁止された。

後釜として百代が運ぶ事で落ち着し、百代が持て囃される横で天は地面に片膝をつきながら「無念っ!」と、悲嘆に体を震わせていた。

ヘソだし短パンの黒髪美少女が高速で料理を運ぶのは、一種の大道芸染みた面白味もあって昼を少し回った所で材料も尽き、苦渋の選択として近隣の店を天に買い出しして貰った分も無くなった。ちなみにやはり近隣から犬猫が吠えて五月蠅いとか、子供が泣き止まないとかの苦情が殺到して百代と板垣姉弟から天にフルボッコという名のお仕置きがあったが、皆が目を離れた際に体力満タンで復活しているのが聖帝クオリティー。

ジョインジョインセイテエー。

「フハハハハ、久方ぶりに会った友人と親交を深める機会に恵まれる

とはなあ、日頃の行いが良過ぎるのも考えものだなあ!!」

「なあ、百代さんよ。こいつのウザさはどうにかならんのか?」

竜兵が辟易（へきえき）した顔で天を親指で示す。その先には自分の話題が出た事に食い付く、三白眼過ぎて目だけ笑っていない様に見える満面のドヤ顔笑みを浮かべる天の姿が!

「……凄く残念だけど、川神院の総力を持ってしても、どうにもならなかったんだよ……本当にどうにも……」

一気に三十歳位老け込んだ顔で涙まで浮かべる百代。板垣姉弟全員で百代に謝る位に疲れきった顔であった。「ま、まあそれはともかく!」

涙をぬぐい、気を取り直して辰子に向き直る百代。

「しばらく見ない間に腕を上げたみたいじゃないか辰子」

百代から見た辰子の気配は以前の散漫とした撒き散らすものではなく、大きい湖を思わせるゆったりとしながら深く沈む底が知れない器の深さをかんじさせた。

「うん、ラオー様は厳しいけどやさしーよ」

「え、マジで?」

辰子と百代が声のした方を見ると、わざとらしく顔をあさつての方向に向けて口笛を吹く天の姿が。ちなみに口笛は吹けてないので、ヒューヒューと陸に打ち上げられた魚の様に息を吸って吐いているだけである。

その頭をガシリと両側から掴み、ゴキリと音を立てて辰子と百代が両側から天の目前に顔を寄せる。

「今の発言は何かなー、北斗神拳に弟子入りを薦めた南斗天くん?」

「ちよつと顔貸せよ、なあ天」

二人の美少女にキスしちゃう位に顔を寄せられる天はもう目が泳ぎまくりの冷や汗ダラダラである。

両側から掴まれた頭がミシミシと軋んでいく、正に「あべしっ!!」五秒前。天の明日はどつちだ。

千尋の谷に落としたら弟片手に登ってきた。

生きる伝説ラオウの逸話は数知れないが、最初から色々クライマツ

クスなのは有名である。

「まず間違いなく天下を取れる位には弟子を厳しく育てると思つていた」

百代と辰子と言う豪腕タッグに吹き飛ばされ、ねじ伏せられて地面に伸びている天の辞世の台詞となった。

「まだだ、まだ終わらんぞっ！」

ジョインジョインセイ……

「もうそれはいいから」

軽やかに百代に殴り飛ばされて聖帝は二度空を舞う。

「ラオー様は私が『ラオー様みたいにムキムキになった方がいいでしょうか?』って言ったら……」

ラオウ、二メートルオーバーのムキムキ世紀末モヒカンが女装しているのを想像する。

「そのままのうぬでいろっ!!」

「って、言ってくれたよ?」

のほほん、と何処か嬉しそうに言う辰子に天と百代が顔を寄せ合つて小声で言葉を交わす。

「ラオウさんがどんな人かあまり知らんが、少し天然入ってるのはよく判った」

「というか、ラオウ殿は何故女装したヒヤツハー野郎を想像したんだ。トラウマでもあったのか」

「あー、私も似た様なのあったなあ」

亜巳も頭をかきながら、辰子の言葉に頷く。

(今ので結構、お腹一杯なんだが……)

(たまに会った同門ではないが、同じ世界に身を置く同志の日常をよく知るいい機会……と、思っておくのだ百代)

二人の思惑を知ってか知らずか亜巳が語るに……

「トキ先生、秘孔の突き方はこうでしょうか?」

「うむ、位置は良いが突き方が甘いな、こうだ!」

「うわらばっ!」

「うん、間違つたかな?」

「まあ、すぐ治してたから大事なかつたけどねえ」

完璧に見えるけど意外と隙があつて親しみ易いよ、と亜巳は普段の鋭い雰囲気を裏切る柔らかな笑みを浮かべている。

(……完全に別人な件について)

(それ、言つた方が良くないんじゃないか?)

(多分、外せない用事があるが弟子の修行も怠れない、とか思い詰めて代役を頼んだんだろう。トキ殿は真面目だからな)

(真面目という単語の意味が私の中で完全に書き変わったぞ今)

うむむ、と唸る百代と天の横で

「ああ、そういやあジャギ師匠も……」

「俺もジャギ師匠が……」

天使と竜兵の上げた言葉に百代と天の顔が盛大にひきつるのだった。

文化祭前半終了!

後半を待て!!

08 帝王文化・後半戦

「むっ、そろそろバンドライブが始まる時間か」

時計に目をやる天に百代も

「おっ、もうそんな時間なのか。辰子達も一緒に見ないか？」

体育館に足を向けながら言う百代に

「学校に来る位だからドマイナーなんだろうねえ」

「あんまり騒がしくないのがいいなあ、ふわー」

チクリとキツイ亜巳に欠伸をする辰子。

「ウチはヘビメタとか聴いてみたいなー。ギューーン、ワーオ！って感じの!!」

「退屈なら出ればいいしな」

結構ノリノリな天使と竜兵。

「うむ、まあ会場の雰囲気にもツて楽しむのもマナーと言うものよな」

「高笑いするなよ」

「む、うむむ。善処しよう」

ギリリと尻を百代につねられながら天達は体育館に移動するのだった。

『さあ、今日来てくれたのは……南斗 de 5 men の皆さんだー!!』
体育館に設置されたステージ上で舞い翔ぶのは何処かで見た様な知り合いっぽい人達でした。

「なあ、天。あれってお前の……」

何処と無く気まずそうに天をチラ見する百代に天は

「なあ、百代よ。我はさつき言ったよな」

「えっ？」

「会場の雰囲気にもツて楽しむのがマナー、だと」

百代の方に顔を向けず体を震わせる天の強がりに百代は

「ああ、そうだな」

今日は精一杯天と楽しんでやろう、と決意したのだった。

「フハハハハ、愚民共よ！ノッているかー!!」

『イエーツ!!』

「フハハハハ、イエーツ!!」

「イエーツ!!」

「何か天も百代も異様にノリノリじゃないかい？」

「仲良しさんだねー」

「イエーツ、フーツ!!」

「イエーツ、イエーツ!!」

板垣姉弟もノリノリで楽しんでいました。

「所でさ、天」

「ぬ、何だ百代よ」

「これってライヴだよな」

「うむ、そう聞いている」

「さつきから曲は流れてるけど、明らかに女性の声だよな」

「うむ、そしてこの南斗 de 5 men に女性はいない」

「楽器もサックスを力一杯吹くだけだったりな」

「うむ、基本飛んで跳ねて石持ったりバイク乗ったりだな」

「……」

「……」

「フハハハハ、イエーツ!」

「イエーツ!!」

「ノリノリだねー、二人とも」

「何かヤケクソっぽくなってないかい？」

「イエーツ!ゴツスゾ、ゴラア!イエーツ!」

「イエーツ!イエーツ!」

力一杯ノリノリで楽しみました。

ライヴも終わり、文化祭も終盤。

校庭で焚かれるキャンプファイアーに仮面の男がガソリンをぶっかけ、何故か屋上まで跳躍して火を投げ入れて去っていった。

「何かジャギ師匠みたいな事する奴も居るもんだな」

「全くだ。世の中広いぜ」

天使と竜兵のノホホンとした反応を

(本人だな)

(前回、話に出れなかったからな)

百代と天は深く詮索する事無く、スルーした。

「百代、ちよいと天を借りるよ」

亜巳が腰に手を当て斜に構えながら

「フハハハハ！ホツ、ハツ！」

何故かマジ顔でファイアーダンスを披露している天を親指で示す。

「ああ、別に……何でわざわざ私に断りを入れるんだよ」

訝(いぶか)しげに首をひねる百代。

「だってアンタは天の面倒役だろう？」

面白そうにクツクツ、と小さく笑う亜巳。

「そんな役目はゴメンだね。私はさっさとアイツをぶつ倒して武者修行の旅に出たいんだからな！」

鼻息も荒く火が手に燃え移り、凄い風切り音を立てて手を振り回して火を消している天を睨む。

亜巳は更に笑い深め、百代の耳元に口を寄せる。

「素直にならないと伝わらない事もあるんだよ」

耳をくすぐる熱い吐息に身を震わせ、百代は驚いた顔で亜巳を見る。

亜巳の顔はもう笑っていない。

百代から、同じ女から見ても整い過ぎていて冷たさを感じる美しさがキャンプファイアーの火に彩られ、強い陰影を描く中に自分にはない『大人』の色気が強く、強く百代に刻みつけられた気がした。

「じゃあ、天は『貰って』いくね」

貰って、と言う言葉に百代は胸の奥にチクリとした痛みを感じた気がした。だけど、それがどんな意味を持っているのか百代にはよく分からなかった。

ただ、キャンプファイアーの横で天に柔らかな笑みで話しかける亜巳と、それに親しみのこもった笑顔で応える天を見るとどうしようもなく、胸が締め付けられるのだった。

「天、今いいかい？」

片手を挙げながら声をかけてきた亜巳に天は振り返る。

「亜巳か、構わんど。ショーも終わった所だ」

「えらく焦げ臭いけどね」

笑う亜巳に天は焦げた跡のついた片手を振る。

「ふん、薄皮一枚軽くなった程度よ」

強がりではなく、本当にそう思っているのだろう。

キャンプファイアーを見る天の横顔は自信と自尊に溢れた真っ直ぐな目をしていた。

(うーん、やっぱり好みの顔じゃないねえ)

中学生とは思えない風格の有りすぎる劇画顔。野太く力強い声に、鍛え上げられた肉体。

それはそれで男らしい特長だが、亜巳が異性として好ましいかと言うとまた別の話である。だが、

「ねえ、天。私はあんたに感謝しているんだ」

「むっ？」

天の隣に立ち、一緒にキャンプファイアーを見ながら亜巳は話しかける。天は少し驚いた様に亜巳へと顔を向けた。

「あんたと会った時はもう家に何も無くてね。金も食い物も、親も……これからどうするか、って希望もさ」

視線をキャンプファイアーに戻し、天は亜巳の話を静かに聴いている。

「だから妹達を連れて家を出たけど、どうしようかなんて何も考えられなくて……あのチンピラ共に絡まれた時はもう『奪うしかないんだな』って思ってた」

それは、天性の暴力があった故の結論。

何も無い自分が妹達を養うには、持っている他人から力付くで奪うしかないという最も簡単で、最も選んではいけない手段。

それまで理性で押し止めていた亜巳を後押ししたのは、幼い妹達を守るという意志。

両親の暴力から、世間の冷たい目から、そして妹達の将来が健やか

である為に嵌めていた理性のタガが外れた瞬間に、その男は現れた。どう見ても悪人顔で服のセンスも最悪で、性格は傲岸不遜で高笑いも五月蠅い亜巳の好みとは全く違う年下の男の子。

自分も年上に見られるが、そんなレベルを超越した南斗天という男の子はあっさりと自分の苦境を救ってしまった。本人は道端の小石を拾った程度の反応しかしてないが、亜巳にとっては自分と妹達の未来を救いあげてくれたヒーローだった。

「だからさ、有り難う。天のお陰で私は今、お天道（てんと）さんに顔向け出来て、真っ直ぐに立って歩けるからさ……本当に有り難うございました」

天の正面から頭を下げる亜巳に天は小さく頷き、

「愚民を真つ当な道に導くのも帝王の義務だからな」

呟く様に言った天を見上げる亜巳。

天は顔を背け、耳まで真っ赤にしていた。

照れているのか、この『男の子』は。

傲岸不遜で自信家で出来ない事など無いと言わんばかりの生きざまを見せるこの南斗天という男が、亜巳には今はしっかりと中学一年生の年下の男の子に見えていた。

「天、ちゃんとこっちを見ておくれよ。お礼のしがいが無いじゃあないか」

口の端を意地悪く歪ませて亜巳は天の顔をこちらに向かそうと両手で天の顔を挟む。

「いや、礼はしっかりと受け取った。問題ない」

「それじゃ、私の気が済まないのさ。ほら、こっち向きな！」

腕組みをし、亜巳から逃げる様に上半身を反らす天に抱きつく様に身を寄せる亜巳は笑っていた。

無邪気で清らかな可愛い笑顔を少しだけ横目で見て、天は更に顔を熱くするのだった。

亜巳の魔の手から逃れた天は人影の少ない校舎裏で竜兵から缶コーヒーを渡され、石段に腰を降ろしていた。

「……苦えな」

「次からは砂糖とミルクたっぷりにするんだな。無論、我のもの」

「おごるのは今回限りだ」

お互いに顔を向けず、缶コーヒーを一すすりして苦味に顔をしかめる。

「……なあ、天さんよ。あんた位に強くなるには何年ぐらいかかるもんなんかね」

竜兵が何気ない風にそう言った。

だが、そこに込められた感情は生なかなものではない。同じ男だから、同じ道を志すからこそ天にはその言葉に込められた必死の感情がよく理解出来た。

「良き師に恵まれ、良き強敵（とも）に出逢い、良き死闘にて生き残れば丁度、十年ほどよ」

グビリ、と缶コーヒーを飲み干し竜兵は

「長えな、長過ぎるぜ天さんよ」

缶を握り潰した。

「なに、夢中になれば光の矢の如くよ。少なくとも我は長過ぎるとも短すぎるとも思っていない」

「それは……」

既に持っているものの余裕ではないか。

そう、言おうとして竜兵は天の顔を見て言葉を飲み込んだ。

寂寥。

そんな一文字が最も相応しい顔だった。

南斗鳳凰拳の師弟愛は他流派でも知られる程に親密である。

オウガイ、サウザー、天。

この三代は特にそれが顕著であった、と言われている。

サウザーと天は生まれ持つての才能が歴代でも一、二を争うと言われ共に幼少から世に出た。

傲岸不遜な彼等の振る舞いは勘違いされ易いが、何よりも愛深く、誰よりも愛に生きるが故に帝王として誰よりも高見にあり、それ故に特別な誰かを作る事は無い。無慈悲に残酷に他者に平等に傲岸不遜

に振る舞うのが、この不器用な師弟の南斗鳳凰拳を継ぐ者の悪癖なのだ。

同じく不器用な男に過ぎない竜兵はだから、

「ヒョウー」

潰した空き缶を空に投げ、手刀で八つに分割して見せる。

「それは……」

驚きに見開く天に竜兵は見下した笑みを見せつける。

「北斗と南斗、両方学べば半分位で追い付けるな」

何とも傲岸不遜、天をも恐れぬ傲慢無謀な言い様。

一つの流派すら人生を懸けて会得するそれを同時に身につけ、追い付くと言ってみせる若さ。だが、それがそれこそが

「フハハハハ、よかろう。竜兵、さっさと私の境地にまで来るがいい。

そこで更なる境地がある事をその身に刻み付けてやろう！」

帝王の身を熱くたぎらせる。

共に拳を交わし、語り合うその時を渴望し、期待するのが心を熱くざわめかせる。

「くはっ、そんな時は俺の拳で地面の味を知る時だぜっ！」

不器用な男が不器用な男の寂しさを忘れさせる、せめてもの強がり
と決意。

それが自分と家族の人生を救ってくれた男への最上級の礼になると信じて、男は決意するのだった。

「おうっ、天。何処行ってやがったんだよっ！」

竜兵とキャンプファイアーの燃え盛る校庭に戻れば板垣天使（エンジェル）が走り寄ってきた。竜兵は手を軽く振りながら離れていく。

「フハハハハ、男同士の語らいだ」

あーん、と下から睨み上げ天使はうろんげな表情になる。あの口より先に手が出る竜兵に話す言葉があるのだろうか。

「いや、そんな事あどうでもいいんだよっ！」

考えるのを止めて左手を腰に当て、右手で天を指差す。

「ウチと名前被りしてるってのが解決してないんだっ！天が名前変え

るまでウチは帰らないからなっ!!」

天使はエンジェルと言う自分の名前が気に入っておらず、身内にすら天(てん)と呼ばせている。南斗天と居るとどちらが呼ばれたか判らない事も有り得るので気に入らないのだろう。しかし、

「……我と居る時は天ちゃんと呼ばれているではないか」

南斗天はその外見と同世代とは一周りどころか十周りも違う風格から、さん付けされる事が多い。間違っても天使の様に天ちゃんと呼ばれた事は一度もなかった。

「……っ!!それでもウチが気に入らないんだよっ!」

姉達と違い、童顔で体つきも幼いせいで年下扱いされる天使にとっては天の周りから一目も二目も置かれる扱いもまた、自分のコンプレックスを刺激する一如(いちによ)になっている。

言ってしまうえば、子供特有の八つ当たりで癩癩で理不尽なワガママなのだ。

「ふむ……我としては似合った名前だと思っていたんだがな」

だから、天の一言は意外でつい引き込まれてしまったのだ。

「そんな訳ないだろ。ウチは天使って柄じゃ無いし。優しくないし、面倒見もよくないし。き、綺麗でも可愛くもない……し」

亜巳は外見こそ冷たく見えるが弟妹達の面倒をしつかり見る事の出来る女性的な優しさが。辰子は周りを和ませる包容力があつた。ざつくばらんで開けっ広げな性格をした天使だが、身近な同性と自分を較べる事はごく当たり前にあつた。

巳(へび)に辰(りゅう)。

姉達が優しさや女性らしさとは遠い勇ましい名前を持ちながらも、女性的な魅力を持つのに対して自分は天使と言う優しさと清楚を体言した様な名前なのにその名前とは程遠い性格なのも天使のコンプレックスになっていた。だから、

「天使とは人間に罰を降す傲慢で自分勝手なものであろう?それに比すれば天使(エンジェル)など可愛いものよ!」

フハハハハ、と両手を左右に開き背をのけ反らせて高笑いする天。

「えっ、いや可笑しくないか、それ」

口ごもり、左右の手を絡ませる天使。

「まあ、世間一般の認識はともかく」

天は中腰になり、下から覗き上げる様に天使に視線を合わせる。

「我が知る天使は生意気だが腕が立つ、まだまだ未熟なひよっ子よ！」

ニヤリ、と言わんばかりの子憎たらしい笑み。

迫力のある悪役顔で浮かべる笑みは何とも憎たらしくて、腹が立つ顔だったが、

「う、うるせえ！ウチは天使（てんし）じゃなくて天使（エンジェル）だつっうの！」

ゴシゴシと目をふき、天使は叫ぶ。

「フハハハハ、さもあらん。名が体を現すのではない、その人間の生きざまの後に名が広まるのだ。我と居る時にちゃん付けされぬ様に生きて見せよ、天使（てんし）!!」

フハハハハ、と高笑いしながら去っていく天に中指を立てて睨み付けながら天使は口の端が持ち上がるのをどうしても止められずいた。

（ちくしょう、格好いいじゃねえか！）

名前をどう呼ぶのではなく、どう呼ばれる生き方をするのが大事。

天使の小さな胸に染み渡る様に入ってきたその言葉に天使はどうしようもない心地好さと、自分の体の奥に火が灯った様な熱さを感じていた。

「見てろよ、天。お前に天使様って呼ばれる様になつて見せるからよ！」

何をどうすれば良いかは判らない。

だが、聞くべき人は教えてくれる人は幾らでも周りに居る。それすらも、あのデカく、居丈高で、どうしようもなく格好いい背中の男が与えてくれた出逢いなのだ。

自分に期待しているのか興味があるのかすら、今はまだ判らない。

だが、自分の天使の生きざまを見たいと言った。

それに応えられる位。いや、あのラスボスみたいな悪役顔と三白眼

を驚きと尊敬に見開かせる位にデカイ生きざまを見せてやりたい。
そう、天使は心に誓ったのだった。

キャンプファイアの火も陰りが見え始めた頃、辰子と天は校庭の端にある芝の高台に並んで座っていた。

「ふわー、今日は楽しかったよー」

ぐっ、と両手と背を伸ばし辰子は息を吐き出す。

「フハハハハ、我が川神中学のO☆M☆O☆T☆E☆N☆A☆S☆H☆I（おもてなし）は気に入って頂けたかなっ!？」

「うん、バンドとか面白かったねー」

「お、おう……」

何とはなしに意気消沈する天と、んー、と胸一杯に息を吸い込む辰子。

天は何処か遠くを見て顎を撫でている。

そんな天を見て、辰子は腕を組み、うーん、と顔をしかめる。そして、ポン、と手を打ち天の膝元に飛び込んだ。

「むっ!？」

「えへへ、天君の太ももは固いねー」

ゴロゴロと頭を転がす辰子に天は所在無げに手を浮かし迷わせた後に顎にまた戻し、ため息をつく。

そんな天の頬に辰子は寝転がりながら右手を当てる。

「悩み事あるなら、聞いたげるよ。天君?」

「ふ……む」

幾ばくかの逡巡（しゅんじゅん）を繰り返した後に、天は辰子を見下ろしながら訥々（とつとつ）と語りだした。

「北斗神拳に貴様らを導いたのは正しかったのか、考えていた」

噛み砕く様に、それでも奥歯に挟まるためらいを吐き出す様に天は言う。

「あの時、他の手立ては考えつかなかった。今も、他の道は思い付かない」

ためらいに言葉止まる天の頬を辰子はゆっくりとほぐす様に撫で

る。

「百代の妹である一子を見てみると、つい貴様らを思い出すのだ。我が導いたからこそ、今があり、更に先もある、と」

決断に後悔は無い。

退かぬ、媚びぬ、省みぬ。

この生き方に迷いは無い。だが、

「はるか先にまで道は続いていく。それを我は背負えるのか、それを我は導き続けられるのか……」

人生八十年と言われる昨今、自分の生きてきた数倍の年月を他者にあてがう。

その先の見えない恐ろしさよ、その遠すぎて見えない終着点が望まざるものであった時の苦しみ。

それを想像するだけで、天は背中に冷たいものが流れ、心臓が固く動きが鈍り、息は浅く短くなっていく。

帝王として在るべき姿に憧れはすれど、たった四人の人生を背負うだけでこの重さ。

天はそれを担うには未だ幼過ぎた。

「天君は優しいねー」

フワリフワリ、と天の頬を撫でながら辰子は笑う。

全てを許し、全てを包み込む様な柔らかい笑み。

「道を示したのは確かに天君だけど、その道を歩くって決めたのは私達なんだよ」

しかし、それでも他に道はあったのではないか。

あるいは人が人を打倒する修羅の道ではない、そんな道が。

「あるかもねー」

「ならば……」

「あんまり私達をなめると痛い痛いするよ！」

パシッ、と天の頬を叩く辰子。

驚きに目を見張る天。その赤く染まる頬を優しく撫でながら辰子は嬉しげに笑う。

「ラオー様やトキ先生にジャギ師匠が居て、亜巳ねえやリユーヘーや

天ちゃんが居る。毎日大変で、毎日楽しくて、悲しい事も苦しい事も一杯あるけど……」

辰子は胸に両手を当てて、目を閉じ、柔らかく口許に笑みを浮かべる。

「全部、ゼーんぶ私のものなんだよ。天君には一欠片だってあげないんだから」

その辰子の柔らかく、それでいて鋼の様に堅い意思が込められた言葉に戸惑う天。

えへへ、と辰子は天を下から見つめながら笑いかける。

辰子なりの気遣いだったのだろう。

最初の道こそ定めたのは天だが、その後続く道を歩むと決めたのは自分の自分だけの意思だと。

辛く苦しい修行も天の為ではなく、自分が選んだ生き方なのだ。そう、天に伝えたかったのだろう。

いつしか、力が抜け柔らかくなった天の膝枕に頭をのせたまま辰子は寝息を立て始めていた。

キャンプファイアーの火も消え、空には真ん丸の満月と満天の星空が輝いていた。

あの星の数だけ宿星があり、あの星の数だけ様々な生きざまがある。

そんな中で南斗の将星は昨日より一際強く輝いているように見えるのだった。

板垣姉弟達と別れ、天と百代は川神院の帰途についていた。

「久し振りに会えたからもうちよい話したかったな」

「うむ、まあまた会う機会もある。それまでにこちらも怠けて笑われぬ様に精進せねばな」

殊勝な天の言葉に百代は眉をしかめ、横から天の顔を覗き込む。

いつも通りの悪役顔。

だが、昨日までと違い何処か張り詰めた部分が抜けてサッパリとした自信に溢れている様に見えた。

「むーん、つまらん！」

グニツ、と天の顔を両手でつかみ引つ張る百代。

「な、なにゆをすりゆかみよみよよ！（な、何をするか百代）」

「亜巳や辰子達と何か話してただろう。エロかエロな話なのか？それともラブかラブい話題か!？」

「ラブもエロも無いわっ!!」

天が百代の手を振り切りながら叫ぶ。

そんな天をジー、と睨み付ける百代。

「ほんとーか？」

「……無論」

フイツ、と顔を逸らす天。

「お、お前その反応って事は……」

「し、知らん。知らんぞ、我は何も知らんのだぞー！」

逃げる様に走り出す天を追い、百代もまた走り出す。

『幼くして帝王の道を歩む事を決意した男の姿を百代に見て貰いたい』

鉄心が天を通して何を見せたいのかまだ何も判らない。

『貰っていくよ』

亜巳が言ったあの言葉がまだ上手く自分の中で消化出来ていない百代は、

（分からない。自分の事も、天の事も……）

走る天の背中を見ながら

（取り合えず、こいつの生きざまってやつを誰よりも近くでずっと見ていてやる！）

そう、決意するのだった。

南斗の将星の横で大きく輝かんとする星が強く、強く光った様に見える夜だった。

09 帝王の一日・前半戦

冬も深まり、師走に入ったこの頃。今日は聖帝こと南斗天の一日に迫ってみよう。

朝、朝日が昇らぬ内から彼は布団から身を起こす。畳敷（たたみじき）に煎餅布団（せんべいぶとん）の純和風が世紀末な外見に恐ろしく似合わないが、川神院に（勝手に）居候している立場から文句は言わない。将来的には天涯付きのベッドにフカフカベッドを思い描く聖帝だが、そう言った寝具は背骨の歪みにつながるので修行中の身には早いとか考えながら布団を押し入れにしまおう。意外とストイックだ。

そして、息を思いつきり吸い込み両腕を広げ、背筋を仰け反らして朝一番の高笑いを……あげない！

（ニヤリ）

見ている読者に渾身のドヤ顔。

そう、聖帝は常に進化するのだ。

朝一の高笑いはほぼ間違いない百代の正拳か、鉄心の毘沙門天か、釈迦堂のリングか、ルーの起き抜け寝惚け神拳によりテレッテーされる事を学び、高笑いはしないのだ！

これにより、聖帝の残機は一つ増えたも当然。凄いで聖帝、偉いぞ聖帝、貴様がナンバーワンだ。

「フハハハハ！」

「うるせえ！」

「死ね！」

「ハイハイハイー！」

「静かにせんかつ！」

テレッテー×4

さて、起き抜けからハードな耐久試験を受けた聖帝が背中を物理的に煤けさせながらヨロヨロと歩き出した先には

「あつ、天さん。お早う、今日も早いわねっ！」

川神院の玄関先の石畳で柔軟体操をする川神一子（かわかみかずこ）の姿があつた。

赤い髪を肩口まで伸ばし、茶色のどんぐり眼をクリクリと動かす顔は人懐こさと愛敬に溢れている。まだ凹凸の少ない体と元気一杯の声は少年の快活さを連想させるが、白い体操服と紺のブルマが女である事を主張していた。

今まで台詞が二回しかなかったとか、描写の少なさは師岡ことモロより少なかったりと不遇を困う彼女だが、川神院に養子縁組されて今は川神院の師範代を目指して勇往邁進、毎日を修行に費やす日々である。

「フハハハハ（ちよつと小声）、お早う一子よ。我より早いとは毎朝感心な事だ！」

そうかなー、と照れ笑いしながら頭をかく一子。

「何せ、我より早いのはヒューム・ヘルシング殿かサウザーのジジイ位しか居ないからなっ！」

「えっ、天さん凄いわっ！世界三位ね、銅メダルね、表彰台に昇れるわっ！」

「ハツハツハ、悪意なくデイスるのは一子の特技だなっ」

尊敬の眼差しを向けられながら、落ち込むという器用な事をしながら一子と天は朝のロードワークに繰り出すのであった。

「フハハハハ（小声）、フハハハハ（小声）」

朝の川神市を聖帝が、道路を滑走路に見立ててんじゃねえかとばかりに両腕を平行に広げて翔んでいる。

「ま、待って待って。天さん、早すぎるわっ!？」

後ろから全力で走る一子を置き去りに、走るといふより滑空しているようにしか見えない天だが、

「何を言う。まだまだローギアよっ！ここから我は更に加速するっ！高まれ、我が脚に宿るブーストよっ！」

足に力を入れると早くなるらしい。

天に遅れながらロードワークをこなす、河原に辿り着いた一子は息も絶え絶えになりながら

「天さんの走り方が謎過ぎるわ。アタシも真似すれば早くなるかしら」

と、中腰で膝を手に当てながら天に顔だけ向けて訊く。

空気椅子をしながら優雅に足を組むというジョジョ世界の住人もビックリなポーズを決めながら、スポーツドリンクをストローですする天は

「まあ、ゲームシステムの違いもあるからな。一子もmugen入りすれば空中ダッシュやブーストは当たり前前、ジャストガードで百代の正拳を弾く位は出来る様になるだろう」

「何を言っているのかサツパリだわ。うう、やっぱり頭も鍛えなきゃ駄目なのかしら……」

涙目の一子である。

モロ辺りが聞いたら、現実とゲームを一緒にしないでよ、と叫びそうだが

「フハハハハ、まあ生まれた世界観の違いと言うやつだな。そう嘆くな一子よ、我も流石に星落としては体得出来ん！」

「そうよねっ！向き不向きってあるわよねっ！」

よく判らない励ましをする天と、それで立ち直れる一子の仲は非常に良い。端から見ると会話のすれ違いっぷりが行従妹先生とwagi先生の絵柄の違い位に酷いが、二人は仲良しである。

「さあ、今日も制圧前進から始めるかっ！」

「今日もゆるーおうまいしん、頑張るわっ！」

明るさを増した朝日に向かい左手を腰に当てて右拳を振り上げ、二人は元気よく修行に勤（いそ）しむのだった。

さて、朝の日課を終えて魂尽き果てた一子を担ぎながら川神院に戻れば、起き出してきた川神院の修行僧達が朝の修行を終えて朝食を作っている。

「ふむ……」

一子を仮眠室に寝かせて、修行僧達が忙しそうに立ち働く廊下に立ちながら我らが聖帝は一考する。

川神院に世話になつてゐるからには何かしら奉仕をして恩返しをするべきではないか、と。

例えば掃除や朝のおかずを一品増やしたりなど。

「よしつ、我が手を借して……」

「あつ、お早う天君は静かにしてれば充分だからね」

「高笑いは近所迷惑だから、ゆつくりしててね」

「朝ごはん少し待っててね。大人しくしてるんだよっ!」

川神院の修行僧さん達は天へと気さくに朝の挨拶を交わして、純和風の廊下を歩き交うのだった。

「ぐー、むにやむにや、まだアタシのお腹は満たされてないわよっ!」

幸せそうに寝言をかましている一子の横で、天は体育座りをして朝食が出来るのを待つのである。

「お早う、朝は何か大人しいなお前」

朝の修行を終え、汗を流した百代がタオルで頭をふきながら現れる。天が真剣な顔で体育座りをしているのを見かけるのが、川神百代の朝一の習慣なのだった。

「フハハハハ、さあ登校の時間だつ!」

朝食を食べ、玄関で靴を履きながら高笑いの聖帝のハイテンションに

「流石の天さんね。朝の修行をものともしてないわ」

ついて行けるのは一子ぐらいである。

「なあ、一子。お前は天みたいにはなるなよ」

切実に、本気で心配する百代。愛すべき純真無垢な義妹が聖帝みたになつたら、彼女の前科に殺人罪がつきかねない。

「大丈夫よ、お姉さま!人には向き不向きがあるってアタシ学んだものっ!」

「お、おう……?」

握り拳で力説する一子に目を白黒させる百代。

「まずはブーストダッシュが出来るように努力するわっ!」

「天、貴様の死に場所はここだーっ！」
「人のセリフを盗って何という言い様だ！よかろう、相手になってやる！」

玄関先で天地を揺るがす大決戦を始める二人を川神院総掛かりで止めて、登校するように蹴り出すまでが川神院の朝の日課である。

「あつ、天さん。おはよー」

「天さん今日も学ラン決まってますね！」

「天さん、今日は学食で月一特別ランチやってますよ。席取りは任せて下さいッス！」

「うむ、お早う」

何故か入学一ヶ月で肩口が破け、裾はしや襟際がボロボロになった学ランを着た天に様々な声が掛けられる。民家が建ち並ぶ普通の道なのだが、聖帝が歩くだけで修羅の国に通じてそうな雰囲気になるのが世紀末クオリティ。

「百ちゃん、おはよー！」

「百ちゃん宿題ちゃんとやった？」

「はよつ、百ちゃん。今日もご夫婦出勤デスナー」

「うん……お早う」

何やら複雑そうな顔で横を歩く天を見上げる百代。

「何だ百代。宿題は見せんで、自分でやれ」

「お前の私に対する評価が酷いのがよく判った……じゃなくてっ！」

首を振り、抗議の目に変える百代。

「何で私がちゃん付けでお前はさん付けなんだ？強さに差は無いし年齢も同じだし、見た目は……うん、まあ見た目はね？」

「一子といい百代といい、何でこの姉妹は悪意なく人をデイスるのか……まあ、あれだ。人の上に立つ者のカリスマ性の違いと言う奴かな、フハハハハ！」

うーむ、と腕組みし悩む百代と突如として発生した高笑いに周りをビクンとさせる天。

「おう、百代に天か。お早う、今日はいつもより早いな」

「お早うございますうう、お二方!!」

そこに小十郎を伴った九鬼揚羽が片手を挙げながら『上』から落ちてきた。

ズドン、という落下音付きで。

砂ぼこりが舞う中で百代は少し疲れた顔で

「お早うございます、揚羽先輩。今日も現れかたが凄いですね」

「フハハハハ、ヘリからお前達が見えたから挨拶しようと思ってなー!」
「ヘリの操縦者が困っております!やはり、下車する時は降りますボタンを押すべきではないかと思考しますですっ!」

「うむ、小十郎良きアイデアだっ!早速、九鬼のヘリ全てに付けさせる様に上申するか」

「飛行中のヘリから降りるのは揚羽先輩位で……」

現れていきなり暴走会話を始める揚羽と小十郎にツツコミを入れようとして、天の方に目をやる百代。

「……お前はしないよな?」

もし、そうなら限定的にヘリの飛行中に飛び降りる変人がこの場では圧倒的多数になってしまう。

「……うまあ、ヘリから飛び降りはしないな」

百代に視線を落とし、何でそんな事を訊くか判らないと言った顔をする天。

「そ、そうか。まあそうだよな……」

「我が自ら翔んだ方がヘリより早いしな。小回りも効くからヘリを使うなど無駄の極みよ、フハハハハ!」

ピシリ、と百代が石化する。

「ほう……無駄と申すか」

「何という無礼な発言、聞き逃せないぞ南斗天!」

身構える揚羽と小十郎に対し

「ほう、我が道に立ち塞がるか先輩どもよ。よかろう、相手になってやる」

仁王立ちで闘気を充実させていく天。

その横で体をプルプルと震わせる百代。

「おや、百代の様子が……」

「お前らまとめて変人どもがー!」

「おめでどう、ももよはぶしんにしんかしました!」

揚羽や小十郎の豪腕をそれ以上の威力の正拳で吹き飛ばし、隣りの天の膝を蹴りで正確に打ち抜いて体勢を崩し、倒れかかった所で正拳からのアツパーカットで打ち上げる。

揚羽専属のヘリのパイロットが白目で下から打ち上げられた天を見て死ぬほどビビったのはまた別の話。

「飛行中のヘリから降りる人は毎日見ているが、飛行中のヘリの高さまで吹っ飛んで来る人は始めて見た」

とは無事帰宅した彼が妻にこぼした台詞である。

一通り人外の会話をかます超人達を蹂躪した百代は揚羽達を飛行中のヘリに押し込み、天を引きずりながら登校に戻るのだった。

「あつ、天。宿題は見せてくれ」

「み、見せぬ、渡さぬ、写させぬ」

「堅い事言うなよー、頼むよー」

ペコペコと頭を下げる百代を見ながらクラスメイトは語る。

「百ちゃんは本当に天さんに甘えてばっかだよねー」

「天さんは頼り甲斐があるからなつ、仕方ないね」

「だから百ちゃんは百ちゃんなのだ」

普段の行いが呼び方に出てしまっているのを百代は知らないのだった。

ちなみに

「飛行中のヘリに途中乗車して来た変人は川神の武神だけだった。あれは変態レベルの変人だった」

とは揚羽専属のヘリパイロットの言葉である。

帝王の一日はまだまだ続く!

次回も真剣で帝王に恋しなさい

帝王の一日をお楽しみ!!

10 帝王の一日・中盤戦

男子家を出ずれば七人の敵あり(だんしいえをいずればしちにんのできあり)

とは、社会に出れば多くの困難がある事を指す。

帝王もまたその敵に会わんとしていた。

ケース1

風紀委員

「あー、服装チェックやつてるなー」

川神中学の校門に辿り着けば、校門の前で風紀委員が登校してきた生徒を一人一人止めて髪型を注意したり、襟元を正させたりしている。

奔放な行事やイベントがある反面、厳しくする所は厳しく締める。川神中学が進学校としての面目を保っているのは、こう言った地道な活動を大事にしている地盤があるお陰である。

百代もまた緩めていた首もとのスカーフを締め直すなど自己チェックをし始めたが、

「ぐ苦勞」

「はいはい……」

周りから頭一つ抜けた南斗天は教師さながらの態度で軽やかに突破し……

「つて……待てや、そこの番カラー!!」

思いつきり止められていた。

んっ、と後ろを振り向き勘違いだったかと校舎に向かおうとする天の前に風紀委員(男)が回り込む。

「二年の南斗天だなあ……」

地獄の底から響く様な積もり積もった怨念を感じさせる低い声を発しながらギョロリと目を剥く風紀委員に、天は眉間に皺を寄せ口も上向きに寄せて困った様な表情をする。具体的には

「……(ニユツ)」

「その、因縁つけられる覚えはありませんなー、と煽りかました顔をす

るなー！書いてる人が表現に困つとろうがー!!」

作者の表現不足によりお見苦しい文章があった事をお詫びいたします。

「ふうん、しかし我は校則通りの制服しか着ていないぞ」

「いや、その理屈だと上半身裸でもまかり通つちまうからな」

両腕を広げて肩をすくめる天。本人は意外と真面目に言っている
辺り手に負えない。

「制服の替えはこちらで用意しよう。とりあえずは立て替えるが代金は払えよ」

手渡される制服にその場で着替えようとして、百代にぶっ飛ばされる天であった。

そして、朝のホームルーム。

担任が出欠を取る時には両肩が破け、裾はしがボロボロな番カラ天さんの姿が！

「何でだよっ！」

どこから来たのか、教室の扉をガラガラピツシヤンと開けて風紀委員（男）がツツコミを入れに来た。

「先輩よ、ホームルームは受けないと内申に響くぞ？」

「くそっ、見た目の割りに妙に常識的なのが腹が立つ！」

うんうん、と頷く百代も居る。

「しかし、先輩よ。これは仕方ないのだ」

悩む様に天は顔の前で祈る様に手を組む。

「ほう、言い訳位は聞いてやろう」

腕組みをしてかかってこいと言わんばかりの風紀委員（男）。ちなみに担任は何事も無かった様に出欠をとっている。

「例えば、百代に殴られたとする」

「前提があれだが、まあお前を止められるのは百代くん位だからな」

「まともに食らえば我とて只では済まない一撃を受ければ服などは当然破けるのだ」

「……まあな」

「そこでっ！」

天はやおら立ち上がり、制服を脱ぐと後ろの席の男子生徒が真新しい制服を天に着させる。

「来い、百代！」

「えっ、ああ、またやんのか」

仁王立ちで構える天に、何故か慣れた風に構えを取る百代。

「川神流無双正拳突き!!」

その一撃は正に地を砕き、天を割る必殺の一撃！

しかし、教室内には風一つ立たないのは標的にのみ威力を集中させる百代の達人レベルの技術があつてか。否、そこにあるのは

「ぬっ、ぐ……ふぬっはあー！」

天が叫ぶと同時に、天が着ていた制服の肩口が破け裾はしがバリバリ、とばかりに裂けていく。

「高橋ー」

「はーい」

「土浦ー」

「風邪で休みでーす」

周りの状況が淡々と出欠を取っているだけにシニールさここに極まっていた。

「……えっ？」

風紀委員（男）が理解が追い付いてない顔で固まっている。

「お疲れさまっす、天さん」

「ふうー、極限の集中力が居るなやはり」

「集中ありや出来るってもんでも無いが……まあ、凄いわな」

やりきった感で席に座り始める天や百代に頭を抱えながら風紀委

員（男）は言葉を絞り出す。

「えっ、何？ギヤグ？」

周りからおだてられ、いい気に高笑いを始める天を見ながら風紀委員（男）の横にいつの間にもやら九鬼揚羽の姿が。

「フハハハハ、我が説明しようっ！」

「あの……出来れば普通に歩いて出てきてください」

「気配を読め！まあ、つまり百代やら何やらの一撃は周りを巻き込んで被害が出るからな。天はいつの間にもやら自分だけに威力を集中させて周りに被害が出ない防御術を編み出したと聞いている！」

「はあ、凄いつすね」

「完全に威力を殺し切れなくて服が一部破れてしまうそうだがなっ！
まだまだ奴も未熟者と言う事よ、フハハハハ！」

高笑いをして一瞬にして姿を消す揚羽。

二年の教室から

「フハハハハ、我はここに居るぞっ！」

とか聞こえて来るので出欠の確認の合間に来たらしい。呆然とする風紀委員（男）の前で

「南斗ー」

「フハハハハ、ハイ！」

天は手を挙げながら元気よく返事をするのだった。

ちなみに三年の後半位から南斗天は普通に服装検査を通過出来る様になったとか。

街中で警察に職務質問を受ける回数は逆に増えたらしいが。

「天さん、制服破けて無いと逆に似合わないつすね」

「そうか……」

「コスプレっぽいよな」

百代の何気ない一言にガチで落ち込むのはまた別の話である。

大道芸さながらのホームルームも終わり、一時間目が始まる。

百代が速攻で舟をこぎ始める横で、天は黒板に書かれた文字をノートに書き写していく。真面目にやっているのだが、本気であるが故の周りが劇画調になる重苦しい雰囲気と、黒板を睨み付ける眼力が強すぎて教師はいつ天が「貴様の死に場所はここだ」とか言い出すんじゃないかと気が気ではない。天と百代の担任曰く「慣れればイケる」らしいが、そんな豪胆な教師は日本中探しても川神学園か川神中学のこの教師だけである。ちなみに去年は九鬼揚羽の担任も勤めた事から

この教師は問題児対策のスペシャリスト扱いのようだ。教育委員会の影の七人だとか、一人例外児童対策課とか言われている。

さて、真面目に勉強に勤しむ南斗天だが、ここでも難敵は舞い降りる。

ケース2

古典

普段は古風な言い回しや前時代的な身ごなしが目立つ天ではあるが、古文は苦手である。どれだけ苦手かと言うと

「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山際、少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる…有名な文ですね。では南斗君、現代語に訳して見て下さい」

「うむ…春は明け方の風情が良い。徐々に白くなって行く山の辺り、特に紫色の雲が細くたなびく所など特に良い。まあ、つまりは…」

目の辺りを抑えて面白くてたまらん、とばかりに天が笑う。

「我が世の春が来たー！と叫びだしかねん位に春が好き過ぎて堪らん、と言った所だな。迸る感情を読者に感じさせるこの作者はお茶目に過ぎるぞ、フハハハハハ！」

「うん、零点。隣の川神さんは？」

「えっ、春は過ぎしやすいからよく眠れるよな？」

「…」

「…」

「…」

「今時、廊下に立たされるとはな」

「前時代的だよな」

真剣な顔で頭と両手、右足の膝の上に水の入ったバケツを乗せた鶴の構えで廊下に立たされる天と百代。毎回、趣向を変えた罰を与えられる二人を校内を巡回する教頭か校長が見つけてビビるのが恒例になっているのだった。

午前中を辛くも乗りきった聖帝。

「フハハハハハ、頭を使うとカレーが食いたくなるな。カレーがっ!!」

執拗なカレーアピールに前髪をいじる百代はうっとおしそうに

「勝手に食えばいいだろう」

とすげない反応。

「う…む…」

少し肩を落としながら寂しそうにしよんぼりと立ち尽くすのであった。

昼休みの喧騒の中でのそんな聖帝に、クラスメイトは生温かい視線を優しく送る。

「天さんは相変わらず百ちゃんラブやな」

「というか、未だに我が儘言えるのが百ちゃん位なのが何と言うか…ふふ、恥ずかしながら母性本能くすぐられてしまいましたね」

「基本、人見知りだからね天さん」

理解度の高い友人が出来ていたりする。

しよんぼりとする天に仕方無いなとばかりに溜め息をつき、百代が立ち上がるうとすると

「へへ、天さん。今日は月一の特別ランチがカレーですぜ。一緒に…食べに行かないか？」

天の後ろから肩を叩くのは何故か舎弟とか三下とかの単語が思い浮かぶクラスメイト（男）。

「ふ、フハハハハ！ま、まあ一緒に学食もやぶさかではないな！行くうではないか、さあ行こう！」

意気揚々とクラスメイト（男）と肩を組んで大股に歩き出す天の後ろ姿を、百代が眉間に皺を寄せ不機嫌な顔で見送る。

「ふふ、百ちゃん…一緒に学食行こうか。今なら天さんと一緒に席になれる特典付きさ」

「いや…わざわざ一緒に座るつもりは…」

「判ってる判っているわ。ただ、私達は百ちゃんと天さんと一緒に学食で青春したいだけなのよ」

今まで感じた事の無い生温い感じの気を発するクラスメイト（女）に何とも言い難い難い気分になる百代だったが、流されるままに食堂に向かうのだった。

ケース3

学食の食券

さて、食堂では学生が立ち並び食券販売機に列を成している。頭三つ位抜けて並ぶ天の違和感は遠近感という言葉の存在を危うくさせていた。

(やべえ)

「フハハハハハ、特別ランチが楽しみだなっ！」

(やべえ)

前後に並ぶ学生の顔が戦慄で青くなっているのがまた気の毒な感じである。

「つうか、あいつに並ばすなや」

「いや、天さんが食券買いたいつて…」

「多分、ボタン押したいんだね…」

列に並びながら空気を切り裂く風切り音でボタンを押すシャドーを繰り返す聖帝。

ボツ、ボツ、ボツ、と人間種に属する生物が越えちゃいけない感じの音の壁を越えている音がするが、気のせいだろう。

そして、食券販売機の前に辿り着いた天が万札を販売機に差し入れ、構えを取る。

ユラユラと円を描く様にゆつくりと、しかし止まる事なく肩から指先まで流れる運動エネルギー。

見る者が見ればその熟練された動きに才能とたゆまぬ努力の跡を、素人ですらその動きによって帝王が放つ不動にして凝縮されていく膨大な気(エネルギー)の気配に知らず知らずの内に後退せざるを得ない。

食堂が奇妙な静寂に包まれ、天の周りがポツカリと開いた穴の様に人の輪が出来た。

天の気配が溜め込む様な重厚さから、鋭く弾ける様な気配へと変わった瞬間、

「ヒョウッ！」

風が駆け抜けた。

……

「何かしたの、今?」

「凄いスピードでボタンを押したんじゃないか? 私もよく見えなかったけど」

川神百代をして見えない速さとはいかほどのものか。常人には捉えられぬ正に神速の領域。

「ホアタツ、ホアッホアアアタツ、ホアタタタタツ!!」

流派が違う掛け声と共に天の指が食券販売機の上を駆け抜ける。風が巻き起こり、紫雷（しでん）と見間違えぶれる腕、指先はしかしあくまでもソフトタッチで販売機のボタンを押す。

正に極致、正に至芸、正に神業。

速さ×質量⇨破壊力だと言うのに、帝王は武神すら見切れぬ速さとその丸太の様な腕で前後する莫大なエネルギーを食券販売機のボタンを押し込む瞬間だけ壊れない様に指先だけで見事に操作しているのだ。

ただ速いだけならば食券販売機は無惨に穴だらけとなっただろう。ただ気を操作するだけばその反動で食券販売機は吹き飛んでいただろう。

帝王が誇る速さを僅（わず）かにも損なう事なく、聖者の如き優しさでもってその反動を自らの腕に受ける事でこの絶技は地上に現れた奇跡として顕現したのであるっ！

「ところで、食券が一枚も出てこないみたいだけど…」

「速すぎて機械が反応出来てないんだろ」

「フハハハハハ、まだまだ行くぞ!」

結局、百代に後頭部をしこたま強く殴られて止められるまで聖帝オンステージは続いたのだった。

11 帝王の一日・後半戦

昼食の月一特別ランチカレーバージョンはミートボール入りだった。

「……（スウ）」

「何で天さんは泣いているんでしょうか？」

「いや、いちいち私に聞かれてもな。判んないよ」

カレーの器を捧げる様にしたま目を閉じ涙を流し始めた天に恐怖に近い感情の視線を向ける一同。

「我がカレー人生に悔い無し……」

異様に透き通った声を出す天に、ギョツ、とする周りの反応を更に驚愕に導いたのは、天が天国への階段を昇る様なポーズで物理的に上昇し始めた事だ。

「えっ、何？新技？」

「て、天さんが天に召されていらっしやる!!」

教会にでも飾られそうな絵画みたいになって昇天していく天の余りの神々しさに一同、茫然自失となって立ち尽くしている。

「お止まりなされ、南斗殿ー!!」

凄まじいスピードと絶叫で天の片足に飛び付いたのは九鬼揚羽の従者、小十郎。

物理法則を無視して上昇していく天の足に必死に食らい付き、天の両足を振り回す様に上半身をねじ曲げ下半身は床を噛む。

結果、物理法則内に強制帰還した天は小十郎の全体重を持って空中から引きずり降ろされた勢いのままにボディスラムの形となる。つまり、顔面から床に叩きつけられるのだった。

「……ー!!」

声も出ないままに顔を両手で覆い、床を転げ回る天。

「フハハハハハ、生きながら昇天しかけるとは南斗の将星はやる事がいちいち飛び抜けているなっ！」

腕組みをして仁王立ちした揚羽がカラカラと笑いながら現れる。

「揚羽様ー！任務完了致しましたー!!」

「うむ、大義である小十郎！」

絶叫従者の爆音会話でようやく茫然自失となっていた百代も意識を復帰させた。

「揚羽先輩、有難うございました。何か呆然としてしまつて……」

「何、良い余興を見た借りを返しただけよフハハハハハ！」

「揚羽様のご機嫌が良くなるならば例え火の中、水の中、川神院の中でも飛び込んで見せますっ!!」

「うおお、姉御格好いいツス！」

「小十郎さんも可愛いー！」

「あーげは!あーげは!!」

気つ風よく豪快に笑う揚羽に周りが揚羽コールを始める中で、実家を火の中とかに並べられた百代が妙に味のある顔になっていたのは仕方無い事であった。

「フハハハハハ、旨い!お代わり!!」

何やかんやで席も確保し、絶叫主従含めて昼食を囲む中、天はカレーを貪り食っていた。

「天殿、三杯目はそつと出した方が……」

「フハハハハハ、我も負けられんな。お代わりだ、小十郎！」

「喜んで、揚羽様ー！」

「意味が全く違うが、また食い過ぎで腹壊すなよ天」

「も、百ちゃんが諺（ことわざ）を理解している……だと!？」

戦慄するクラスメイトに苦い顔で川神院で（勝手に）居候している天を親指で指差す。

「……アレが川神院で何時もお代わりしてジジイに言われているの見て知つた」

ああ、川神院でもあんな感じなんだ。

と、周囲が見る先で、天はチンチンとカレーの器をスプーンで叩いているのを学食のおばちゃんに行儀が悪いと怒られている。

学食で腹を満たした天達は大満足の昼休みを過ごした。這い寄る次なる難敵の存在に気づきもせず。

ケース4

睡魔

よく食べ、よく学び、よく遊び、よく成長する中学生。彼等の食欲は満たされた。

生理本能は次なる欲求、睡眠欲を満たすべく学生を次々にその歯牙へかけていく。常人の数倍の体力、数倍の耐久力、常人の数倍の忍耐力を誇る聖帝としてその鋭く深く食い込む牙には抗えない。されど、それに屈するのは敗北に他ならない。肉体を鍛え、精神を磨く者として本能などに遅れを取るなどあってはならないのだ！

同レベルのそれらを持つはずの百代が隣で気持ち良さげにスヨスヨと寝ているのは視界から外して頂こう。彼女は女性的な部分も十分に成長期であり、それを妨げるのは人類の損失なのだからして。

さて、帝王に敗北はないのだ、と眠気に耐える天の眼光は今にも閉店しますとばかりに閉じそうになる瞼(まぶた)を怒りの形相と見間違わんばかりにクワツと見開き、口は痛みを耐えんばかりに唇をかみしめ、身体全体を巡る気を眠気を吹き飛ばさんとばかりに活性化させている。

具体的には何か、ゴゴゴゴ、とか物理的な音が出ている本気100%で死闘に挑(のぞ)む世紀末帝王が中学校の教室に出現する訳であった。

川神中学、いや世界でも有数レベルの胆力を誇る天と百代の担任教師ですら背中に感じる圧倒的圧力に背筋は冷や汗が滝の如く、黒板に今にも叩きつけられそうで足すらもよろける。

そして、三本目のチョークを折った処で諦めて振り返った先には！安らかに意識を手放し、スヤア、と眠りこける聖帝がおったとき。睡魔には勝てない。

これは実例を伴った教訓である。

類似例・睡魔には勝てなかつたよ…。

さて、放課後となり掃除も終わった天達は帰り支度を整えていた。武術と暗殺術の違いはあれ、心身を鍛え上げるにはたゆまぬ修行に身を投じねばならず部活に費やす暇はない。

残念がるクラスメイトと別れの挨拶をすませ、川神院への帰途につく二人に更なる難敵が立ちふさがる。

ケース5

寄り道と買い食い

成長期の学生のみならず、ありとあらゆる人類を誘惑する夕飯前の帰宅に襲う空腹。更に街中で日々、集客に勤しむ店舗の魅力は例えようのない魅惑空間！

禁欲的な日々を送る彼等を……（一話から十話までを参照中）……結構、充実した日々を送る彼等だからこそしてクラスメイトなどと交わす流行り廃りの会話から寄り道して服や漫画、ゲームに音楽の新作を見てみたいという欲望を制御出来るのか!!

「おっ、あの服ちよつといいな。覗いてみるか」

「我は本屋で新刊を少し見たいな。今、読んでいる大河小説の新作が発売日のはずだ」

……躊躇う事なく青春大爆発していた。

物理的に爆発すればいいのに（百代は自分から爆発する必殺技を持っています）。

「おっ、コロツケのいい匂いが……」

場所は川神駅前の商店街、金柳街。精肉店の店先からはジャガイモや野菜を衣に包んで揚げる香ばしい

香りと油の弾ける食欲を誘う音がしていた。

「我はカニクリームコロツケ一択だ！甘い所を頼むぞ！」

「いらつしゃい、百代ちゃん。天ちゃん。太らないようにねー」

顔馴染みの初老に差し掛かろうという恰幅の良い女性が慣れた仕事で手招きしながら、百代と天に笑いかける。

「食わないと痩せるんだ。二十個頼む」

「川神院の者にもついでに土産だ。二百個頼む」

顔は恐いが気前はいい聖帝である。

「はいよー。朝から天ちゃんの為に揚げてる気分だよ。ありがとうねー」

「フハハハハ、我に奉仕する精神が染み込んでいるようで結構では

ないかつ！」

「うるせえ、店先で高笑いすんじゃねえ！客が逃げちまうわっ！」
「ぐわっ！」

店の奥から目にも止まらぬ影が飛び出し、スカーン、と天の頭に命中するお玉。膝から崩れ落ちる帝王。

そんな光景を口の回りにコロツケの衣をつけてムグムグと食べながら見る百代。

「天に当てるとか親父さんは何者なんだろうな」

「さあ……あの人は昔からお玉を外した事ないからねえ」

あの川神鉄心がサウザーとブイブイ言わせてた時から外した事がない。当然、サウザーも天と同じく膝を地につけていたらしい。

「ぐう、痛い」

涙目になりながらコロツケの袋を受けとる天。

川神駅前の商店街、金柳街での何時もの光景である。

曜日によって立ち寄る店は違うが、二人はこうして両手に一杯の袋を持ちながら肩を並べて夕陽の射す川神市を歩き、川神院へと帰っていく。

本当に爆発すればいいのに（イチゴ味原作の聖帝はダイナマイトで爆破されても全身包帯だけで普通に戦っていました）。

12 帝王の一日・終盤戦

川神院へ帰宅した天と百代。

「お帰りなさい、お姉様に天さんっ！」

満面の笑顔で両手を精一杯に広げる一子がお出迎えである。その愛らしくも無邪気な振る舞いに、普段はやや憂鬱そうな百代の相好はみるみる崩れ

「ただいまー、一子ー。いい子にしてたかー？」

左手で一子を抱き寄せ、右手でお日様の色と匂いのする赤い髪をワシワシヤとかき撫でる。

苦しいわー、お姉様ー！

と叫びながらも目をつぶり心地好さげにする一子。

美少女二人が抱き合い笑顔で慈しみあう姿は世界はまだまだ美しい可能性に満ち溢れていると見る者に感じさせるのだった。

「……」

「……」

それを見守る天と一子と一緒に出迎えに来ていた釈迦堂。

おもむろにお互いが向かい合い、両手を広げる釈迦堂と両腕を大驚の様に広げ、突撃体制をとる天。

「釈迦堂殿ー！」

「天ー！」

ボクシヤー

じゃれあう姉妹の横で、何故か互いの頬にクロスカウターのストレートを叩き込みあう男が二人。

世界は暴力で成り立っていると思わせる酷い絵面だった。

「で、何で二人で玄関先に倒れてたんだネ？」

「百代と一子の仲の良さを見て釈迦堂殿との仲の良さも見せるべきか
と思つて……」

「男と抱き合うとか拒否反応しか出ねえよなあ……」

介抱してくれたルー師範代の前で正座しながら、天と釈迦堂は世界はこんなはずじゃない事ばかりだと嘆くのだ。

「お姉様、アタシあの二人が何をしたいのかよく判らない時が多いわ」
「あの二人自身判ってないだろ。その場のノリとテンションで突き抜けるタイプだから」

「流石、お姉様！同類相憐れむ、って事ね！」

「……ちなみにそれ言ったの誰だ？」

「天さんと釈迦堂師範代よっ！」

一子の言葉に正座しながら凄いい勢いで振り返る釈迦堂と天。

「ゲエッ！」

「た、他人には言うなと固く誓ったではないか一子おー！」

蛙が潰れた様な声を出す釈迦堂とブルータスお前もかとばかりに叫ぶ天。

そして、

「さあ、貴様の罪を数えるがいい」

顔に黒い影がかかり、瞳だけが赤く光るラスボス武神ご降臨である。

「うむ、一言だけだ百代」

「よかろう、聞いてやる」

「ラスボスというより血に狂ふ武神って感じだぞ？」

後日の釈迦堂曰く

「あの時のモモの正拳は威力だけなら免許皆伝だった」

ちなみに周りへの被害は天が開発した防御術によって防がれた。釈迦堂と天の犠牲によって……

「何で、俺まで服が破れてんだよ……」

「すまぬ釈迦堂殿。範囲攻撃は周りの人間の服も巻き込まれるのだ……」

「やっぱ天才だわ、お前」

仲良く半裸になる天と釈迦堂であった。

さて、実質的な被害は男二人の服だけなので着替えるだけで準備は万端。川神院の修行は今より始まる！

「じゃあ適当に感謝の正拳突き一万本な」

「やれるけどもうちよつとやる気出してくれ」

とある漫画を読みながら百代に指導する釈迦堂と

「シュワァ、シエアツ！」

「天さんの動きが見えないわ……」

「なるほど、修行内容も見えなければ何処でやっても同じという事ネ」

全身ブレた写真の様に高速で動きながら他流派の門内で堂々と鍛練に励む天。

川神院の師範代にすら目視出来ない速さで動く天がようやく止まり……

「ふうっ、ビリーズブートキャンプは疲れるな」

思つくそ鍛練内容を暴露していた。

「……一子相伝の暗殺拳って何なんだろうな」

「他人に教えなきやラジオ体操も一子相伝の鍛練方法なんじゃね？ほれ、右によれてんぞ」

寝転がりながらもしつかり見ている釈迦堂と背中を煤けさせながら鍛練に励む百代であった。

夕飯前の間食として天の買ってきたコロツケを談笑しながらかじり、型を繰り返す川神院一同。

天もそこに加わり、南斗流の型と比較し組み手で検証し合う。

奥義ともなれば話は別だが、鉄心やサウザーも若かりし頃には組み手で互いの技術を競い合わせたという。

戦後の混乱とそこに生まれた闇、それに立ち向かう為の必然であったが、それが平和の世に人同士の交流に繋がってきた。

全てを己の目で見て、体で触れてきた鉄心の白い眉の下で光るものがあつた事を知る者は居なかった。

夕食前に汗だけ流し、一同は席につく。

「むう、この漬物。ただ者ではないな」

鋭い眼光で右端の漬物の入った小皿に箸を向ける天。みなぎる闘気が周りの空気を歪ませ、天の体格が何倍にも膨れ上がった様に見える。

「何で夕飯相手に闘気を出すんだよ」

バリバリと漬物を噛みながら白米を掻き込む百代。

「おいしいわっ、焼き鮭が美味し過ぎるわっ！」

「もつとゆっくり噛んで食べるネ」

「ったく、夕飯の時まで忙（せわ）しねえなあ」

「ほっほっほ、よく食べよく動きよく考えよく遊ぶのが修行の秘訣よな」

犬の様に鮭に覆い被さりながら箸を動かす一子に丁寧な作法で食べるルー、釈迦堂は味噌汁をすすりながら呆れた様にしており、鉄心はゆっくりと晩酌の杯を重ねる。

会話こそ少ないが、川神院の夕飯の席は何ともゆったりした空気の中で進んでいくのだった。

夕飯も終わり、一時の談笑を経て川神院の修行は更に加熱していく。

組み手や体に負荷をかける鍛練の替わりに型を繰り返す時間が増える。

人間は寝ている間にその日の情報を脳が整理していると言われる。夢はその副産物とも言われている程だ。

型を繰り返す、その意味を理解し、体に馴染ませる。これが一番辛い。

型とかフォームとか言われる『効率的な体の動かしかた』とは、すなわち人間の自然な動きに則（のつと）った動作を無理矢理違う形に変える事を意味する。

歩く動作一つとっても、やや内股寄りにして、足先を内側に向けた方が運動効率が飛躍的に跳ね上がる。腹筋を締め、頭の先から背筋と踵を一直線にしたいわゆる良い姿勢の方が体の可動領域が増える。

そんな、普通ではない体の動かしかたが武術の型であり極意なのである。

だから、

「帝王に構えは無いのだ！」

見事な仁王立ちを決める天も辛く苦しい修行の果てに会得した型を繰り返すのだ。多分、趣味ではない。

「帝王に……」

「なあ、天」

「何だ百代」

「その構えするのにその掛け声は必要なのか？」

正拳突き型の型を一子と繰り返していた百代が悲しそうな表情で天に聞く。一番近くに居たので特に被害が大きいのだ。

「あうー、耳がキーンとするわー」

隣で一子が耳を押さえながら目を×（ばってん）にしている。

「まあ、声は出さなくても可能だぞ」

「そうか、近所迷惑だから声出さずにやれ」

「了解した」

そして再び型稽古に戻るのだが、

「……（バツ！、ドヤア）」

「……（サツ！、ニタア）」

「……（ザッ！、ヌフウ）」

「ごめん、やっぱ声出していいや」

「そうか？ 後、百回はする予定だが」

「構える度にドヤ顔したりニヤニヤ笑うのがキモい、後こっちは見んな」

「天さん、顔が怖いわ」

涙目の一子とゲンナリする百代であった。

夜の修行も終わり、大浴場でゆったりと湯に浸かる百代と一子。

夜通しの荒行などもあるが、年に数度だけで川神院は基本的に早寝早起きである。

「あー、疲れがとれるな〜」

「はふ〜……」

お互いに肩を寄せ合い、頭を預け合いながら目を閉じる姉妹二人。

そんな大浴場の外では、

「食らうがいい！ 必殺十字極星サープ!!」

「だが甘いネ！カットサイドカウンターヨ!!」

「抉れやあ！リングホロウシヨット!!」

「まだまだじゃ、毘沙門スマツシュ!!」

「ヒュー、見ろよ。ピンポン玉が弾丸みたいだぜっ！」

「やはり師範代レベルになるには自らの体だけでなく外部にも気を伝播させなければならぬ、か」

「しかもラケットにも気をまとわせ、ピンポン玉を砕けぬ様に変形させぬ様に打つ度にお互いに気を込め直しているぞ」

「真、恐るべしは南斗の将星の才よ。あの歳にしてあの技術を会得しているとわ……」

「ううむ、このような気の修行方法があるとわ……」

マジ顔で実況なんだか解説なんだかしている川神院の内弟子達の後ろで、百代と一子が牛乳を並んで一気飲みしているのだった。

「プハー、この一杯がたまらんなっ！」

「お姉様みたいに、ないすばでーになりますようにっ！」

「るおおおおっ！フハハハハハ、勝利の二文字は帝王にこそ相応しい!!フハハハハハ！」

「速さでは勝っていたネ……卓球道はまだまだ奥深いと言う事力……」

「しゃああああ、ジジイ破れたりっ！」

「くうっ、儂も老いたか……だが次はないぞいつ！」

「フハハハハハ、負け老いぼれの遠吠えが聞こえるぞっ、釈迦堂殿！」
「全くだ、年寄り縁側で介護されとけばいいのになあ！」

肩を組んで高笑いをする天と釈迦堂が毘沙門天に吹き飛ばされ、半裸になる一秒前の事であった。

天と釈迦堂の貴重な犠牲により川神院にすきま風が発生する事は無く、各々が床につく頃。

「もう、寝るか」

両手を上に挙げ、伸びをする百代。

「ふわー、お休みなさいお姉様、天さん」

眠たげにアクビをする一子

「うむ、今日もよき日であった」

頬杖をつきながら片目をつむる天

各々が自室に戻る中で、それぞれの明日を夢見る。

「明日もゆるーおうまいしん、頑張るわ」

「明日も制圧前進、我が道に迷いなし」

二人に迷いは無い。

「明日こそは……」

一人はまだ見定められぬ己を見つけ出す為に。

川神市は静かに眠りにつくのだった。

13 帝王のヒ・ミ・チユ

01 帝王爆誕 星

将星やら極星やらありますが、北斗の拳では北斗や南斗といった流派の登場人物には宿星があり、その星によって宿命や使命、生き方などをなぞらえる事があります。

まあ、格好いいからそれっぽい事言ってるなあ、位の認識でよし。

南斗天（以下・天）は将星や極星、南斗の流派で一番強い、そんな意味で使っています。

帝王に逃走はないのだ！

アークシステムワークスの製作した北斗の拳の格闘ゲーム（AC 北斗の拳）においてサウザーが奥義、彷徨十字鳳を使う際に叫ぶ台詞。ひたすらに格好いい。

天翔十字鳳

本来は攻撃が当たらない絶対回避の技なのだが、相手を一撃で倒す技が全てのキャラにあり、サウザーはこの奥義がそれに該当する。原作北斗の拳と使用方法は違うが、銀河万丈さんの格好良すぎる声と光り輝く鳳凰をまとったサウザーの姿のインパクト含め、サウザーというキャラのイメージをプレイヤーの脳髓に叩き込む画面外にも一撃必殺の奥義。一度見れば忘れられないので見てみよう。

仁王立ち

サウザー含め天のデフォルトの構え。

北斗の拳原作では「帝王に構えはない」とサウザーが言った為に、AC 北斗においても足を肩幅に開き、両腕も胸を開き、肩の真下に垂直に垂らしている。相手の攻撃も腕や足を使わずにノーガードでその体を受ける徹底ぶりは批判するよりも称賛に値する漢前さである。

構えではないが、戦闘時もデフォルトがこれなので本作では「仁王立ちの構え」と呼称しています。

構えだけど構えていない。相手より速く攻撃を叩き込む自信がみなぎる帝王サウザーを象徴する単語として使っています。

02 帝王お宅訪問

聖帝マラソン

AC 北斗においてコンボ（何処かで防御出来ないで連続で当たってしまふ連続技）に様々な名称があり、バスケやドリブルなどスポーツ関連の通称がつけられ易い。

サウザーは槍を投げる技があり、連続ヒットする様を聖帝オリンピックと呼称されたりする。

天はそんな人外機動に新たな一ページを加えようとしているらしい。お願いだから止めて欲しい（川神院一同）。

フハハ、フハハ、フハハ

天が連続で高笑いをしている時は大体が走っている時。

AC 北斗にはブーストと呼ばれる移動方向にダッシュ出来る機能がある。サウザーは空中でブーストすると両腕を広げ滑空する様に「真っ直ぐ」進む。無論、羽ばたかずとも真っ直ぐである。

天はそれを再現しているだけである。

勿論、傍目には物理法則無視の目眩がする光景である。ブーストは一定距離進めば切れる為、天はデフォルトの仁王立ちで垂直に落ちる。

説明すればそんなものか、と思うが勿論、傍目には異様極まる光景である。百代は慣れた。

子様

AC 北斗において、シンというキャラを使うプレイヤーに「5様」と言うお方がいる。

細かい説明は省くが、南斗獄屠拳、と言う技を上手く使う方で、とある大会で「┌、◇、┐」と言う登録した本人も解読不能なプレイヤーネームを使用し、併せて、5様「┌、◇、┐」と呼ばれる。

小雪の小（こ）と5（ご）をかけて使わせて貰っています。

南斗獄屠拳

AC 北斗においてシンというキャラクターが使う飛び蹴りにしか見えない技だが、南斗獄屠『拳』という名称が示す通り、本来は相手

と交差する一瞬で相手の手足を切り刻む技。

しかし、北斗の拳主人公であるケンシロウと同じ様な態勢で交差する瞬間には、蹴り足が交差する瞬間でコマが止められたり、AC北斗の拳では蹴り技扱いだったり、前述の5様が特徴的な使い方をすることもありネタ扱いの極みみたいな技となっている。

小雪が師匠であるシンを悩ませる表現として使わせて貰ってます。ぶっぱ獄屠脚

小雪オ리지ナル技。前述の獄屠拳をただの飛び蹴りにした技である。ぶっぱ、とはフェイントや相手の隙に攻撃を叩き込むのではなく、突発的に技を繰り出す格闘ゲームの専門用語。前述の5様はAC北斗の拳において、このぶっぱを獄屠拳で上手く使う為に戦略性や駆け引きを好むプレイヤーに嫌われている。ただ、華のある技なので見る分には楽しいですよ？

スレ

インターネットにおいて掲示板と呼ばれる、読んだり書き込んだり出来るもの。様々な議論や討論、駄弁りから全く関係ない話までインターネット越しに色々な人と語り合えるツール。

ただ、嘘や冗談も多く真面目に受け取ってはいけない。

03 帝王強襲

南斗孤鷲拳（なんとこしゅうけん）

小雪が学んでいる南斗聖拳一〇八派の頂点とされる南斗六聖拳の一つ。

小雪の師匠であるシンが修めており、南斗聖拳の中では華麗さより、荒々しくパワフルな技を多く扱っている。

「……何かいつの間にか、そう呼んでいた」

北斗の拳原作において、北斗神拳のケンシロウと南斗聖拳のシンの戦いは序盤における最大の盛り上がり所だが、その時点において南斗聖拳の使い手はシンだけであり、設定としては北斗VS南斗という構図だけでサウザーなど影も形もなかった。

故に南斗と言えばシンであり、南斗孤鷲拳なんて名称は原作北斗の

拳において一切存在しない。

AC北斗においては南斗六聖拳の一つとして、この名称がついた。原作では既に亡くなっているシンとしては、南斗聖拳で通っていたのに、何時のまにやら一〇八もの同門が出来てその中で頂点に君臨する六聖拳に祭り上げられているボスもビツクリのキンクリ状態である。

本名はシンなのにキングと呼ばれてたり……

原作北斗の拳においてシンはケンシロウと対面するまで、King（キング）と部下や市民に呼称されていた。まあ、ラスボスつぽさの演出だと思いが冷静に考えると結構痛い設定である。これらの様々な設定がついたシンは弄られ役のイメージが強い。勿論、本作においても堂々たる弄られ役である。イチゴ味シンを考えた従徒妹先生の発想は人外染みて居ると思う。

貴様の死に場所はここだ

元ネタはテイルズシリーズのバルバドス・ゲートティアより。

このセリフが出たら主人公達は死ぬ。

是非とも銀河万丈さんの声で聞きたい。

肩パット付きマント

Google先生に教えて貰おう

ラオウ様やピッコロさんがすぐ出るのは流石である。

威厳が余り身に付いてない、と本人は思っている天の心ばかりのオシヤレである。

世紀末モヒカン

大地は荒野と化し、水は枯れ、文明が崩壊しても結構何となってしまう、現代の若者に心配されるバイタリテイに溢れた人々。髪型はモヒカンが多く、肩パット付きの上半身裸に近い服装を好む方々。ヒヤッハーと叫んだり、やられ声が似合う生態を持つ。

「今じゃ、モモ。パワーを星落としにー！」

「いいですともー！」

元ネタは日本の代表的国産RPG、ファイナルファンタジーシリーズ

ズの四作目より。

元々は「もうひといきじや、パワーをメテオに。」「いいですともー」で、Wメテオという隕石をぶちこむイベントシーンにおける技である。

生身で出来る川神院の恐ろしさと、それを躊躇無く出させる帝王の恐ろしさは語るまでもない。

テレットテ

AC北斗において、相手を一撃で倒せる技を当てて勝利すると流れる音楽の呼称。出だしの旋律が繰り返し使われ印象深く、その部分をオノマトペ（擬音化）するとテレットと聞こえる事からつけられた。ネットスラングとしても使われており、これが出たら一撃で倒されたり倒したりした意味で使う。大体がギャグ的な意味合いで使われる。

ジョインジョインセイテエ

元々はAC北斗におけるキャラ選択の効果音がジョインと聞こえる。ゲーム的なシステムで言えば、瀕死から一撃必殺の奥義を食らうがKOされてから延々とコンボを叩き込まれようが、次の対戦時には体力満タンである。漫画などでも使われにくい表現で、自分の知る限り『速攻生徒会』著・小川 雅史の出鱈目主人公・本多愛（ほんだあい）が使っている位しか知らない。

攻撃一辺倒の柔らかか聖帝ことサウザーの弟子、南斗天。彼もまた豆腐並の防御力の持ち主であった。

前述の通りAC北斗においてサウザーは防御をしない（正確にはガードモーションも仁王立ちのまま）ので、防御力が全キャラ最低である。出が速い攻撃などにより、攻めていれば強いが攻められると立て直しが出来ない位に防御面は弱い。

天もそれに習っているが、天翔十字鳳という究極の回避技があるので強い。勿論、サウザーも本作では一撃技ではなく普通に使えるので強い。ウザイ位に強い。

05帝王敗北

「おや、南斗極星の横に死兆星が」

本来は死に行く人間が見ると言われる死を予兆する凶星。原作北斗の拳においては北斗七星の横に輝くのをAC北斗では、特定の技などで画面内にある北斗七星を象ったマークを七つ輝かせると一撃必殺の奥義を使える様になるシステムで再現している。

見えた人が死ぬので、本来ならこの台詞を言った人が死ぬのだが、まあ細かく考えなくて良い。

「ガ、ガソリンとかありか!? 熱い、熱、熱い!!」

北斗神拳には四人の伝承者候補がおり、長男ラオウ、次男トキ、三男ジャギ、末っ子のケンシロウとなる。

その中でもジャギ様は散弾銃や含み針、南斗聖拳や果てにはガソリンを撒いて着火するなど北斗の拳原作においてはやりたい放題である。

上記は百代の台詞であり、川神院は釈迦堂対ケンシロウ、ルー対トキ、鉄心対ラオウ、ジャギ対百代で川神院と北斗神拳の対抗戦に挑んだ。

ガソリン位は防ぎそうだが、ジャギ様の散弾銃や含み針、ガソリンに至っては一撃必殺の奥義なので防げません。ちなみにAC北斗は対戦型格闘ゲームで、mugenにおいてのタッグ戦においては一撃必殺の奥義を放つと動けなくなったりしますが、本作ではそんな縛りは存在しないので、相手が殲滅するまでテレッテー出来ます。質が数を上回る、いい時代になったものだ。

06 帝王入学

低いビートのBGMをバックに仁王立ちに入る天。

勿論、曲はサウザーのメインテーマ『聖帝十字架』曲の入りからサビまで圧倒的格好良さに満ち溢れた名曲を一度はフルで聞いて欲しい。AC北斗の対戦以外で。

何故ならばAC北斗においてはサビに行く前にサウザーは大抵死ぬか相手を倒してしまうから……

07 帝王不覚

天下一武道会

世界的な漫画、ドラゴンボールの世界的格闘大会。多分、マジ恋

世界には無い。

天翔十字凰

南斗鳳凰拳の奥義。

天を舞う羽の様にあらゆる打撃を回避する神技。

AC北斗では一撃必殺の奥義になりサウザーが回避技を失い、天は回避が必要な時以外にしか使わないなど、無駄使い甚だしい南斗鳳凰拳の奥義。奥義である。

07帝王文化・前半戦

南斗回転生地回し！

TV版北斗の拳において南斗聖拳の扱いは何でもアリであった。人間を大砲に詰めて打ち出す、南斗人間砲弾はつとに有名であり、原作者も流石に頂けなかったという逸話もある。

そんな経緯もあるが、大体は南斗とつけければ何でも許される雰囲気があるのも確かである。用法、用量をしっかりと見定めて使おう。

天もノリで言ってるだけで、こんな技は存在しない……存在しないよね？

「あべしっ!!」五秒前

北斗の拳において有名な敵役のやられ台詞。他にも「ひでぶっ!」などで知っている方も多いかも知れない。北斗神拳は人体の秘孔を一定の気で突く事で、人体に様々な効果をもたらす。

顔が変形していき爆散したり、病を治したり、体の一部が変形して爆裂したり、盲目を治したり、全身の血管が浮き出てメロンみたいになったり……。

あべしっ、ひでぶっ、などの台詞と共に描かれる残酷描写も北斗の拳の見所の一つである。

「うわらばっ!」

「うん、間違ったかな?」

北斗の拳において、北斗神拳の次男トキは医者として活動しているが、そのニセモノとしてアミバという人物がいる。一度見た技を使える様に研究するマメな部分もあるが、他人を実験体にして研究した

り、「俺は天才だっ！」とか言っちゃったりするので問題児扱いである。

北斗の拳ではトキの名を騙り好き勝手するのだが最初は聖人君子なのいきなり性格が変わったりとキャラのブレ幅に定評があったりなかったり、概ね劣化トキ扱いがデフォルト。AC北斗ではトキの動きが変だったりする時に「こいつ実はアミバだろう」とか言われたりする。

上記の「うん、間違ったかな？」は治療と称して病人を実験台にした時の台詞。アミバの代名詞扱いの迷台詞である。「うわらばっ！」はケンシロウに真っ二つにされて死ぬ時の断末魔。そんな関係もあり、トキの代役を買って出たがご覧の有り様であった。

08 帝王文化・後半戦

南斗 de 5 men

前述した南斗六聖拳によるユニット。

原作北斗の拳の名シーンや印象に残るシーンをふんだんにあしらひ、無音ギャグまで付け加え、前奏や間奏に独特の擬音を使い、歌部分は字幕で書かれた行従妹先生渾身のユニット。

その面白さは音の無い漫画ですら非常に面白く、音が鳴り色が付き、動くアニメではストーリー一切無しなのに腹筋に桁違いのダメージを与えてくれた。

その面白さは実物を見て頂くしかない。中の人が歌手の人がいたり、銀河万丈御大に歌わせた偉大なる成果すら生み出したイチゴ味の功罪の闇は深く、光は眩しい。ニコニコ動画やYouTubeで漫画から切り貼りして作った動画もあるので一度見て欲しい。

天としては結構真面目に帝王の道を邁進しているので、そのサウザー他の尊敬出来る人物の姿に衝撃を受けたのは言うまでもない。まあ、ノリとテンションで突き抜けている似た者同士だが。

仮面の男がガソリンをぶっかけ、何故か屋上まで跳躍して火を投げ入れて去っていった。

AC北斗の拳ではジャギ様の一撃必殺の奥義はガソリンを一面に

撒いて屋上の給水タンクに飛び乗り、マッチをガソリンに落として相手を爆殺する。

原作北斗の拳のケンシロウとの戦いにおける再現で、世界広しと言えど屋上まで飛び上がってわざわざガソリンに着火する人がどれだけ居るかと言う話。

百代は天から北斗神拳の兄弟の話を聞いています。板垣一家の話を聞くついでに。結構、喋っちゃいけない事まで天は喋ってそうだが、それはまた別の話。

09 帝王の一日・前半戦

デイスる

貶める、詰る、否定する、侮辱するなど相手をけなす時に使われるネガティブな言葉。

Disrespect(デイスリスpekt)の略で、ネット用語。余りデイスると聖帝はへこんでしまうので気を付けよう！

「まあ、ゲームシステムの違いもあるからな。一子もmugen入りすれば空中ダツシユやブーストは当たり前前、ジャストガードで百代の正拳を弾く位は出来る様になるだろう」

格闘ゲームはゲーム毎に様々なオリジナルシステムがあり、別ゲームのキャラクターが対戦する事は基本的に出来ない。

会社同士が自社のキャラクターを総括的にまとめ、一つのゲーム内で対戦出来るタイトルもあるが、勿論その中での対戦しか出来ない。

それらの壁を破壊し、どんなゲームのキャラクターでも対戦出来る様に作られたのがmugenというツールである。

最低限のシステムは詰んであり、キャラクター登録をすれば時代、システム関係なく対戦出来る正に夢のツールである。

反面、ゲームシステムの違いや環境などは考慮されておらず、絶対勝てない相手やバグによってフリーズしてしまう事も多々ある。

また、キャラクターを改造する事も出来る為本来なら出来ない挙動やシステム、mugenオリジナル技や演出などもある。

格闘ゲームとして発売されていないキャラクターも作る人がおり、原作では格闘のかの字も無いキャラクターが北斗の拳のキャラクターと対戦出来ちゃったりするのだっ！

勿論、非正規ツールなので使用は自己責任でお願いします。

空中ダツシユ

文字通り、空中でダツシユする様に前進、または後退するシステム。出来ない方が普通に。

ブースト

AC 北斗の拳においては現在の状態から前進または後退出来るシステム。発動中の技をキャンセル出来たりするので、本来なら入らないはずのコンボをなどが繋がる。勿論、出来ないのが普通。

ジャストガード

相手の攻撃に対して自分と反対方向に十字キーなどで移動を入力するか、ガードボタンなどでダメージを受けなくしたりする防御をガードと呼ぶ。

相手の攻撃をそのまま受ければダメージを受けるし、コンボを受け続けて更に被害が増大する。また、ガードしても連続で攻撃を受け続けなければ負けてしまう。

そこで、相手の攻撃に合わせてダメージを受ける瞬間にガードするとゲームにもよるが、相手の攻撃を弾いたり、ガードの硬直無しで相手に反撃をする事が出来るようになるシステムを総じてジャストガードと呼ぶ。

ゲームによっては体力が回復したり、必殺技を放つ為に必要なゲージが貯まったりと効果は様々。

百代の正拳が弾けるかどうかは不明だが、一子なら出来るんじゃないかと天は思っているみたいである。

14 帝王のメリークリスマス

「フハハハハハ、ジングルベル！」

「違うわ、天さん。メリークリスマスよ！」

「フハハハハハ、メリークリスマス！」

クラツカーを。パン、と鳴らしながら七面鳥とケーキを前に赤いサンタ帽を頭に乗せた聖帝笑顔が今日もハッスルクリスマス川神院である。

「そっちのクラツカー取ってー」

「飲み物全員持ったかー？」

「つうか天さん、クラツカーはまだ早いよ」

川神院の修行僧に混じり、風間ファミリーの面々もクリスマスパーティーの飾り付けを手伝って今日は楽しいクリスマス。

そんな中で我らが聖帝様は

「…………？」

「おいしいい！天さんがクリスマスケーキを凝視してんぞっ!？」

「(グウウウウ…………)」

シヨーウインドウ越しにトランプットを夢見る少年の様な瞳で、涎を流しながら腹を鳴らしていた。

「チキンより先にケーキを食う気満々じゃねえか!?!誰か止めろよっ!！」

「ちよっ、百代姉さんこっち来てー!！」

「呼ばれて飛び出て川神流・天からの鉄槌!！」

「ごむっ!?!」

頭頂部に打ち下ろしの鉄拳を食らって悶絶するのだった。

「メリークリスマス!！」

パンパンパン、とクラツカーが鳴り響きジュースの入ったコップがぶつかり合う。

ドガッ、バキッ、メシヤア……と、ガラスのコップでは鳴ってはいけない接触音がするが、ここは武の総本山・川神院。

水を入れたコップを逆さにしても溢れない修行位は朝飯前である。

「……今、川神院の恐ろしさを身近に感じたよ」

「あの乾杯だけで僕達、死ねるよね」

一般人である風間ファミリーが戦々恐々とするのはやむを得ないだろう。

「(モグモグ)……?」

「ああっ、天さんがチキンの骨にこびりついた肉が上手く取れなくて困っているわっ!」

「意外とみみっちいな聖帝!!」

暫く悪戦苦闘していた天はイライラとした顔になり、やがて

「フヌハアツ!」

「ああっ、チキンが手刀で真っ二つに!」

「南斗鳳凰拳をお気軽に使いすぎだろっ!」

真っ二つになり真ん中辺りにへばりついた肉をペロロりと舌で舐めとる天。

「すっげえ悪役顔してんな天さん」

「天さんの前の皿に積んであるチキンの骨、磨いたみたいにピカピカだぜ」

「お残しは許しまへん、って感じだな」

「残したらジジイに毘沙門天喰らうからな」

食事一つにも命懸け、世紀末臭漂う川神院であった。

さて、七面鳥も粗方食べ尽くされプレゼント交換のお時間である。

聖帝タンクトップを全員にプレゼントしようとした天の目論みは小雪の蹴り技により、打ち破られた訳で無難に聖帝イラストカードとブロマイド、ついでに南斗百八派の集まりで中国に赴いた際に死闘を経て手にした鳳凰の羽根が一枚。

「ふむ、少々詰め込み過ぎたかな」

パンパンに膨らんだ包装紙の九割がイラストカードとブロマイドである。鳳凰の羽根は端っこで押し潰され変型していた。

「おーい、天ー。ちよっところち来い」

百代の呼ぶ声にパンパンのプレゼント片手に歩み寄る聖帝。

「何だ百代、プレゼントは一つしかないぞ」

「奪うつもりはないからな。いや、それよりコレに心当たりあるか？」
綺麗に飾り付けられた壁を指差す百代に

「ふむ、飾り付けは下僕共がやって……」

壁を見上げれば特大のリボンがついた蓋がついていた。

「……でかい！」

怯える様に後ずさる帝王。

「あ、お前でもないか。いつの間にか置いてあったんだよコレ」

「こんなデカイもん運び込まれたら気付くだろう。警備的に大丈夫か、川神院」

悠に4メートルはある綺麗にラッピングされた箱を見上げる二人。

ダララララララ

何処からかドラムの叩く音が響き始め、会場内の電気が消えライトが目まぐるしく動く。

「な、何だ!?!確定演出か!?!」

「天さん、パチンコ北斗の話はちよつと……」

会場を巡るライトが百代と天の見ていた箱を一点に照らし出す。

ジャジャーン

「南斗獄屠脚ー!」

バリバリー、と飛び蹴りで箱を突き破り出てきたのは赤いサンタコスに身を包んだ真っ白な髪と肌の赤目の少女、小雪。

その飛び蹴りは、AC北斗の拳において数多の強豪プレイヤーを狩った屈指の南斗孤鷲拳キャラの使い手の如く鋭く予想外のタイミング。

「ゴハツ!?!」

つまり、一番近くにいた聖帝におもつくそぶち当たった。吹き飛ばす天、しかし

「何の、リカバリーはまだ効くレベルよっ!」

空中で受身を取り、一回転して態勢を立て直す天。

「あつ、行き過ぎちゃった。阪急往復拳、南斗獄屠脚ー!」
「ブルフォッ!」

小雪の空中受身狩りにより北斗七星はクリスマスの夜空に輝く!

「南斗こしゆくけん、奥義！」

「ふん、間合いが甘いわ小雪！」

壁に跳ね返った天を垂直に近い角度で真上に蹴り上げようとする一撃を軽やかに回避する天。

「あー、避けられたー!?!」

「フハハハハハ、まだまだ修行が足りんぞ小雪よ！」

調子に乗って両手を横に伸ばした態勢で飛び回る。

そこに、

「お邪魔します」

「おう、クリスマスやってんならウチらも混ぜろやっ！」

ドカドカと乗り込んで来るのは板垣一家。その目前では狭い室内で飛び回る天とその下に広がる阿鼻叫喚のメリークリスマス。

「フハハハハハ！」

「季節外れのヤブ蚊が飛んでるねえ。辰、竜、天使！」

「はーい」「応！」「OK！」

フツ、と亜巳の姿がかき消えたと思ったら帝王より高く跳んだ亜巳が鋭い蹴りで天を叩き落とす。

「なにーい！」

「カマッン！」

空中から背中を蹴られ、仰け反りながら落ちる天を天使がゴルフクラブの先端を揺らしながら、大きく振りかぶ待ち構える。

「オラアツ、満塁ホームラン打法！」

「カキーン！」

パワフルプロ野球なスタート音を出し、弾丸ライナーと化す天を竜兵がレスリング選手のような中腰前屈みで手を広げて待ち構える。

「飛べウリヤッ！」

「フンヌルイッ！」

天の服を掴み、勢いを殺さず一回転しながら加速して投げ飛ばす竜兵。

その早さ、超電磁砲（レールガン）の如し！

「はーい、いらっしやーい」

そして、両手を広げ全てを包み込む様な笑みを浮かべる辰子が天の先に居た。

必死に首を振り、涙目でイヤイヤする天だが、アイザック・ニュートンの慣性の法則は彼を逃がさない。

速さ×腕力×体重×気力包容力（破壊力な意味で）

バキメシヤア！

車が法定速度をぶっちぎったスピードで鋼鉄の壁に突っ込んだらこんな音がするだろう、そんな音を全身から鳴らして天は白目を剥いて辰子の腕の中で息絶えるのだった。

きくよくしく、こくのよくる……

クリスマス夜空の下、川神院で南斗と北斗の垣根なく、きよしこの夜が歌われる。

ささやかなプレゼントの交換に一喜一憂する中で、鳳凰の羽根を受け取ったのが誰かは静かに降り始めた白い雪だけが知っていた。